

島根大学考古学研究室調査報告第4冊

石ヶ坪遺跡

発掘調査概報Ⅰ

2002

島根大学法文学部考古学研究室

島根大学考古学研究室調査報告第4冊

石ヶ坪遺跡

発掘調査概報Ⅰ

2002

島根大学法文学部考古学研究室

序

西日本の縄文時代を語る上で、重要な研究課題の一つに「縄文農耕」がある。中でも山陰地方、特に島根県における「縄文農耕」関係の資料の増加には著しいものがある。これらの資料にはプラントオパール、石器の器種組成や使用痕、異系統土器の搬入状況など様々なものがあるが、それらの体系的な研究についてはまだ端緒についたばかりと言うことができ、「縄文農耕」の存在を実証することを含め、今後の研究の深化が全国的にも期待されているところである。

このような研究動向の中、島根大学考古学研究室では山陰地方における縄文時代の「農耕」のあり方、ひいては縄文時代以降の農耕文化の受容と展開について検討を加えるべく長期的な展望のもと、遺跡の発掘調査を中心とした研究活動を継続的に行なうこととした。その最初の調査地として選んだのが、島根県美濃郡匹見町石ヶ坪遺跡である。

今回、匹見町および匹見町教育委員会のご協力のもと、三年計画で石ヶ坪遺跡の発掘調査を行なうことになった。本書はその第一回目の発掘調査概報である。

発掘調査並びに概報の作成は、大学院生および学部三年生を中心として進められた。短期間で調査と概報の作成の両方を行なうにあたっては、並々ならぬ努力があったと思う。この経験を無駄にせず、発掘調査や各作業の意味をしっかりと理解し、次につなげてほしい。

なお、調査中匹見町の方々には様々なご配慮を賜った。記して感謝したい。

2002年3月

島根大学考古学研究室

渡辺 貞幸

山田 康弘

例　　言

- (1) 本書は島根県美濃郡匹見町大字紙祖に所在する石ヶ坪遺跡の第3次調査概報である。
- (2) 発掘調査は2001年8月20日から9月3日にかけて実施した。
- (3) 発掘調査は島根大学法文学部考古学研究室が行なった。
- (4) 本書では柱穴状遺構を「P」、土坑状遺構を「SK」と表記している。
- (5) 土層の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『標準土色帖（1993年版）』を使用した。
- (6) 出土品の整理作業と報告書作成の諸作業には考古学専攻の大学院生および学部生があたり、作業の一部は島根大学法文学部の授業科目「考古学実習Ⅱ」の一環として行なった。
- (7) 発掘調査及び整理作業の参加者は以下の通りである。
発掘調査：渡辺貞幸（法文学部教授）、山田康弘（法文学部助教授）、山根航（大学院1年生）、木下哲仁（4年生）、明石崇宏、厚見崇、井上志峰、谷洋一郎、中山倫希江、樋口英行、和田守加奈（以上3年生）、稻田陽介、小池康明、小林大樹、日高優子（以上2年生）
整理作業：山根航、木下哲仁、明石崇宏、厚見崇、井上志峰、谷洋一郎、中山倫希江、樋口英行、和田守加奈、稻田陽介、小池康明、小林大樹、日高優子
- (8) 発掘調査でのフィールドマスターは樋口英行が担当した。
- (9) 執筆担当は文末に示し、本書の編集は山根航と樋口英行が行なった。
- (10) 出土遺物および記録図面・写真はすべて島根大学法文学部考古学研究室に保管されている。
- (11) 調査および本書の作成にあたって、匹見町町長・教育長をはじめとして匹見町の全面的な協力をいただいた。また次の諸氏、諸機関より御教示・御協力を賜った。記して謝意を表したい。
(敬称略、順不同)
足立克己（島根県教育庁文化財課）、竹廣文明（島根大学汽水域研究センター）、會下和宏（島根大学埋蔵文化財調査研究センター）、藤原英保（島根大学）、渡辺友千代、栗田美文、山本浩之（以上匹見町教育委員会）、齊藤ソノ（雪舟山荘）

本文目次

第一章 序論

1. 遺跡の位置と環境	1
2. 過去の調査の概要	4

第二章 調査の概要

1. 目的と経過	6
2. 基準土層	8
3. 遺構と遺物の検出状況	10

第三章 出土遺物

1. 繩文土器	14
2. 石器	17
3. その他の遺物	17

第四章 考察

1. 検出遺構について	18
2. 出土土器の年代的位置付け	20

第五章 まとめ	22
---------	----

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 第1～3次調査区位置概念図	5
第3図 調査区および遺構配置図	7
第4図 調査区北西壁・南西壁セクション図	9
第5図 SK-01～04遺構実測図	11
第6図 SK-05遺構実測図	13
第7図 出土土器実測図	15
第8図 出土石器実測図	17

図 版 目 次

- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| 図版 1 上 遺跡遠景（北側より） | 下 遺跡近景（南東側より） |
| 図版 2 上 調査区設定状況（南東側より） | 下 調査区全景（南東側より） |
| 図版 3 上 調査区北西壁セクション
（南東側より） | 下 調査区南西壁セクション
（北東側より） |
| 図版 4 上 SK-01・03検出状況（南西側より） | 下 SK-01・02検出状況（南西側より） |
| 図版 5 上 SK-02・04検出状況（南西側より） | 下 SK-01～04半截状況（南西側より） |
| 図版 6 上 SK-01～04完掘状況（南西側より） | 下 SK-05検出状況（北側より） |
| 図版 7 上 SK-05半截状況（南側より） | 下 SK-05完掘状況（南側より） |
| 図版 8 上 出土土器（1） | 下 出土土器（2） |
| 図版 9 上 出土土器（3） | 下 出土石器 |

第一章 序論

1. 遺跡の位置と環境

石ヶ坪遺跡は、島根県美濃郡匹見町大字紙祖に所在する（第1図）。遺跡は紙祖川の河岸段丘の右岸に立地し、遺跡の南東側には中国山地が迫る。遺跡より上流では七村川が、下流では匹見川が紙祖川と合流している。その紙祖川や匹見川にはヤマメ・アマゴなどが生息し、またこういった河川が合流する地点は魚類がよく集まるため、漁場としては最適である。さらに周囲の山々にはクリ・トチといった落葉樹林が生い茂り、イノシシなどの動物が生息している。このように、この地域は狩猟・漁撈・植物採集に適した所といえるだろう。

また遺跡の周囲は中国山地で囲まれているため、山越えによる移動より、中国山地の南西に延びる尾根に沿って移動する交通路が発展していたと考えられる。このルートを利用することで山口方面へ移動することができるため、この地域は山口、さらには九州との交流があったと考えることができる。その証拠として、匹見町教育委員会によって実施された石ヶ坪遺跡の第1・2次発掘調査（渡辺編 1990・2000）において、並木式や阿高式といった九州系の縄文土器が多く出土している。さらに、室町時代には益田氏の居城であった小松尾城が、遺跡の南西側に立地していたことからも、この地域が縄文時代以降においても交通の要所として重要な地であったことが窺える。

町内の他の遺跡についてみてみると、本遺跡も含め縄文時代の遺跡のほとんどは、河川と河川が合流する地域の周辺に延びる狭長な河岸段丘上に立地しているといえる。本遺跡の下流には、縄文時代晩期の水田ノ上遺跡（渡辺編 1991）がある。この遺跡からは、墓あるいは祭祀の場とされる配石遺構が検出されている。この配石遺構は環状列石状のものと考えられ、西日本では類例のないものである。遺物においては、石製勾玉・硬玉製管玉といった装身具類や、土偶・円盤型線刻土製品などの呪術具が出土していることが注目される。配石遺構については、これ以外にも中ノ坪遺跡（渡辺・栗田編 1999）やヨレ遺跡（渡辺・矢野編 1993）などで検出されている。中ノ坪遺跡のものは、縄文時代前期前半の墓群と考えられている。ヨレ遺跡のものは縄文時代後期後葉から晩期前葉につくられたものと推定され、祭祀の場と考えられている。さらに鳥形土製品などの呪術具が出土したことでも注目される。また、石ヶ坪遺跡の第1・2次調査においても、縄文時代後期初頭の配石遺構が検出されている。これらの遺跡は、縄文時代の精神生活を知る上で重要な資料を提供しているといえるだろう。新楨原遺跡（松本編 1987）では縄文時代早期から中期にかけての遺物だけでなく、表採資料として旧石器時代の尖頭器などが発見されている。それまで旧石器時代の遺跡は発見されていなかったため、この発見により匹見町域の歴史の始まりが旧石器時代に遡ることとなった。また田中ノ尻遺跡（渡辺編 1997）からは縄文時代早期と考えられる集石炉が検出されている。さらに、中ノ坪遺跡や田中ノ尻遺跡では轟式・曾畠式といった九州系の縄文土器が出土していることから、石ヶ坪遺跡と同様に九州との交流があったことを示しているといえるだろう。イセ遺跡（渡辺・矢野編 1993）からは、縄文時代後期の土坑墓や、縄文時代晩期ないし弥生時代前期のものと考えられる住居址が検出されている。

次に弥生時代の遺跡についてみていく。下手遺跡（渡辺編 1993）からは弥生時代前期後葉から中

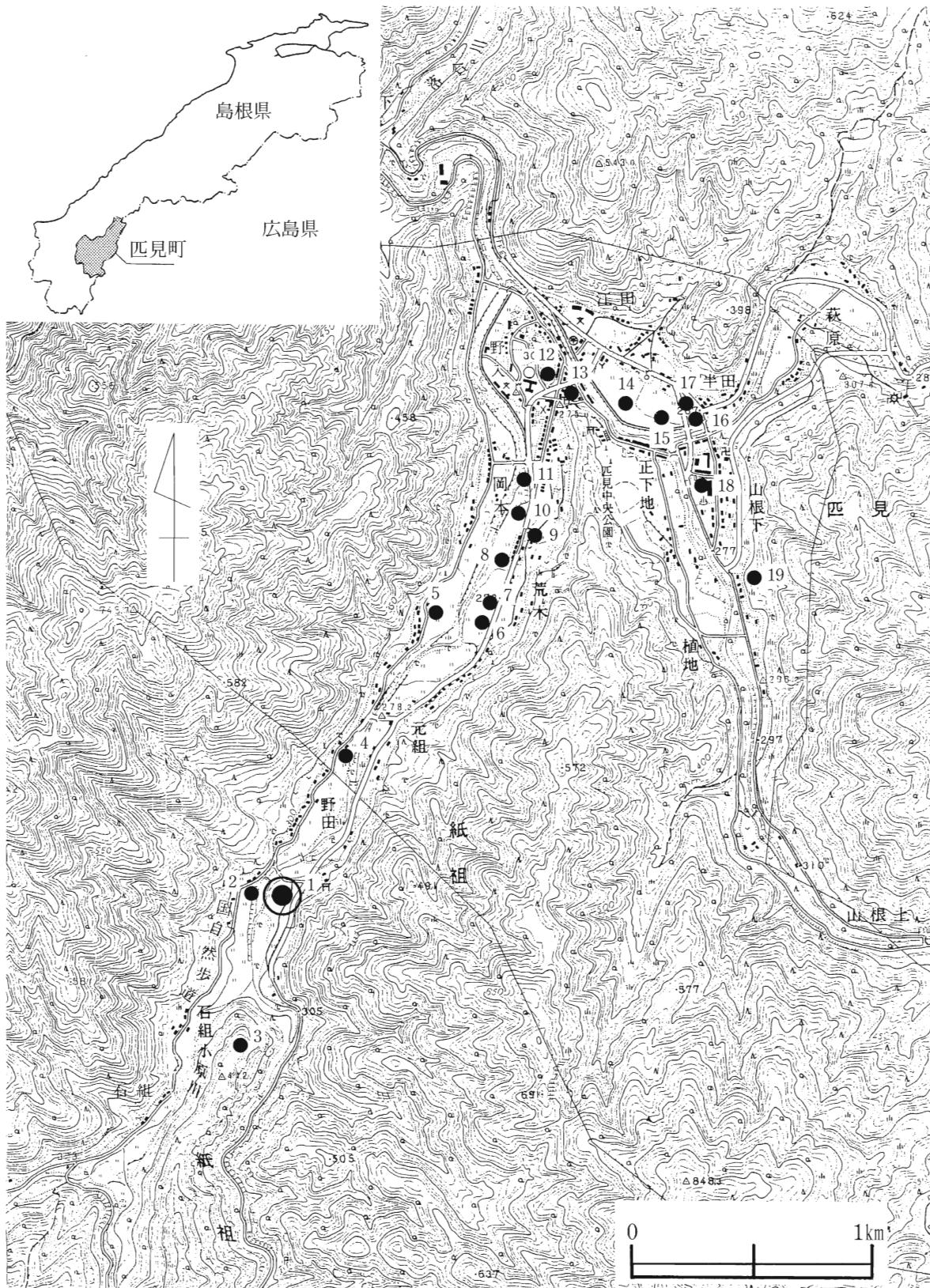
期中葉のものと考えられる配石遺構が検出されている。その性格については墓あるいは祭祀の場といった可能性が考えられているが、そのことを確定しうる骨粉や呪術具などの遺物は見つかっていない。水田ノ上遺跡の一角からは、細型銅戈が発見されている（松本・岩永 1991）。細型銅戈の九州以外での出土例は稀であり、当時のこの地域の祭祀形態だけでなく、他地域との交流の問題を考える上においても貴重な資料であるといえるだろう。この銅戈の製作時期は弥生時代前期末から中期前半と推定されている。またイセ遺跡や筆田遺跡（渡辺・矢野編 1993）などでは住居址が検出され、水田ノ上遺跡・ヨレ遺跡・長グロ遺跡（渡辺編 1991）・下正ノ田遺跡（渡辺編 1991）などでは弥生土器が出土している。これらの弥生時代の遺跡も縄文時代と同様に、紙祖川・匹見川などの川筋にみられる狭長な河岸段丘上に立地している。

最後に古墳時代以降の遺跡についてみてみると、筆田遺跡からは古墳時代前期から後期にかけての竪穴住居址や、8世紀中頃以降とされる柱穴が検出されている。また、石ヶ坪遺跡より約1km下流の河岸段丘上には古墳時代に位置付けられる善正町遺跡がある。その対岸にある長グロ遺跡からは、中世初頭の竪穴住居址が10棟以上検出され、8世紀から9世紀にかけての集落であったのではないかと考えられている。長グロ遺跡の下流には下正ノ田遺跡がある。この遺跡は縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡であり、7世紀後半から8世紀後半にかけての住居址とみられる溝状遺構が検出されている。また、石ヶ坪遺跡の対岸には中・近世を中心とする陶磁器が出土した森ノ前遺跡がある。

このように紙祖川・匹見川といった町内を流れる河川によってつくられた河岸段丘が、古くから生活等の最良の場として利用されていたといえる。(明石 崇宏)

引用文献

- 松本岩雄編 1987『新横原遺跡発掘調査報告書』匹見町教育委員会
松本岩雄・岩永省三 1991「島根県美濃郡匹見町出土の青銅器」渡辺友千代編『水田ノ上A遺跡・長グロ遺跡・下正ノ田遺跡』匹見町教育委員会
渡辺友千代編 1990『石ヶ坪遺跡』匹見町教育委員会
渡辺友千代編 1991『水田ノ上A遺跡・長グロ遺跡・下正ノ田遺跡』匹見町教育委員会
渡辺友千代編 1993『下手遺跡発掘調査報告書』匹見町教育委員会
渡辺友千代編 1997『田中ノ尻遺跡』匹見町教育委員会
渡辺友千代編 2000『石ヶ坪A遺跡』匹見町教育委員会
渡辺友千代・栗田美文編 1999『中ノ坪遺跡』匹見町教育委員会
渡辺友千代・矢野健一編 1993『ヨレ遺跡・イセ遺跡・筆田遺跡』匹見町教育委員会



- | | | | | | | |
|-----------|-----------|----------|-----------|----------|----------|----------|
| 1. 石ヶ坪遺跡 | 2. 森ノ前遺跡 | 3. 小松尾城址 | 4. 前田遺跡 | 5. 善正町遺跡 | 6. 長グロ遺跡 | 7. 銅戈出土地 |
| 8. 水田ノ上遺跡 | 9. 下正ノ田遺跡 | 10. 長通遺跡 | 11. 石仏頭遺跡 | 12. 諏訪城址 | 13. 神田遺跡 | 14. 筆田遺跡 |
| 15. ヨレ遺跡 | 16. イセ遺跡 | 17. 門田遺跡 | 18. 下手遺跡 | 19. 和田古墳 | | |

第1図　遺跡位置図

2. 過去の調査の概要

石ヶ坪遺跡では現在までに匹見町教育委員会が主体となって2回の発掘調査が行なわれており、どちらの調査についても報告書が刊行されている（渡辺編 1990・2000）。ここではこれらの文献に基づきながら、過去の調査とその成果を概観してみることにする。また、第1・2次調査と第3次調査の調査区の位置関係についても触れることにしたい。

第1次調査

1989年4月10日から同年7月31日まで行なわれた。調査面積は約1,200m²であり、調査区はA～H区まで設定された。また第1次調査では1～5層まで検出されたが調査の途中で保存が決定したためF2区以外は上位3層までしか調査されていない。

調査では、3層以下から柱穴・土坑・配石遺構・住居跡などの遺構や、主に3層から縄文土器・陶磁器・石器などの遺物が出土している。

F2区では配石遺構・住居跡・柱穴・土坑・溝状遺構などが検出されている。配石遺構の配石以下は保存のため調査されていない。住居跡は樁円形プランを呈する大型住居であり、F2区以外の調査区からも同様のプランを呈すると考えられる住居跡が検出されている。このことから大型樁円形プランは石ヶ坪遺跡の傾向であると考えられている。土坑は上面に石組や礫群、配石を有するものが多く、それらの多くは炉と考えられている。

出土遺物では縄文土器が大半を占め、中でも最も多いのは中津式土器である。中津式に後続する福田KⅡ式は少なく、縄文時代後期中葉とされる彦崎KⅠ式と併行する鐘崎式、小池原上層式などの九州系の土器が多く出土している。また、中津式と縄文時代中期前葉とされる並木Ⅰ・Ⅲ式が遺構内において共伴していることから両者の時間的位置付けも問題とされている。

第2次調査

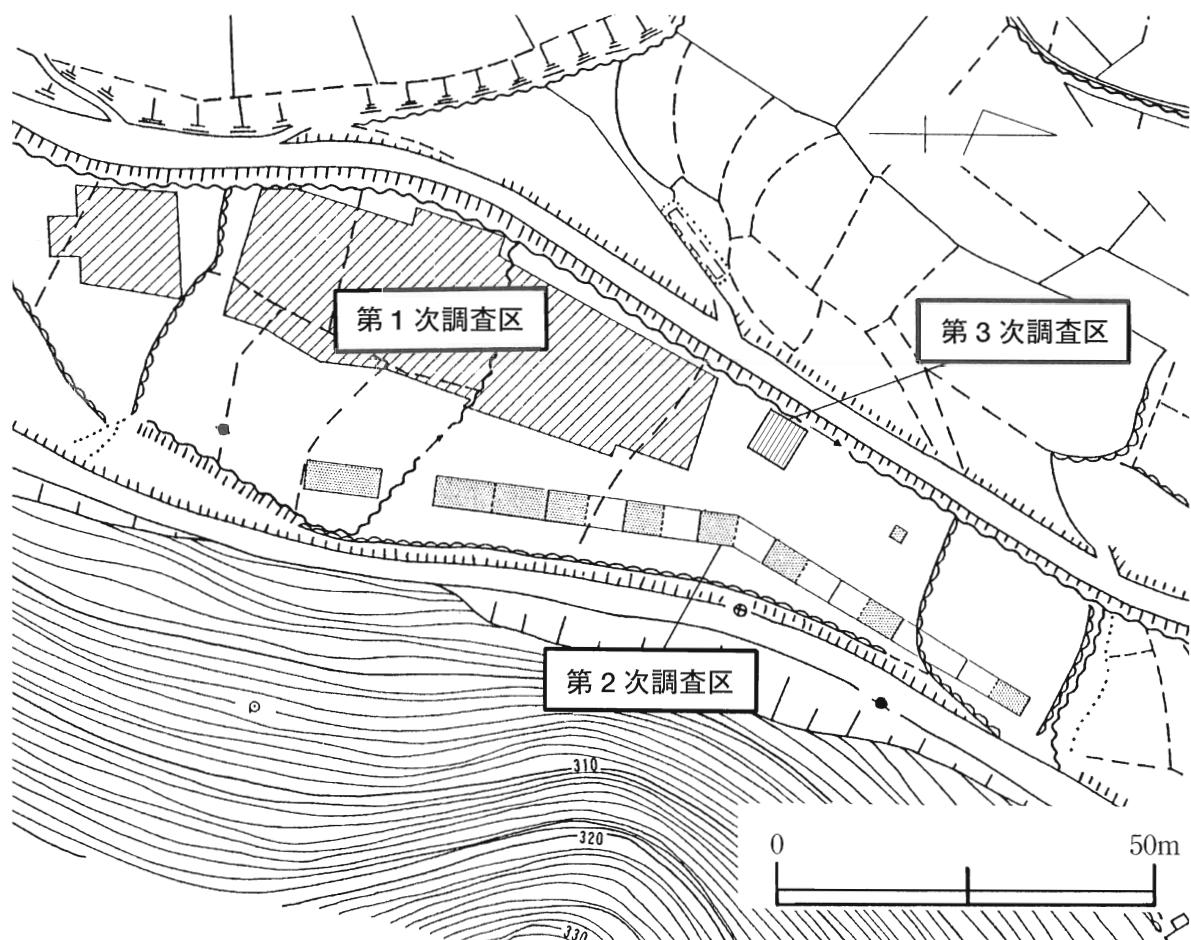
1999年4月16日から同年9月30日まで行なわれた。調査面積は約200m²である。調査区は第1次調査で設定した調査区の東側にA～I区まで設定し、第2次調査では1～7層までの層が検出された。

A～I区の調査によって、遺物を包含した層位は、1～2層（1期）、3層～4層上位（2期）、4層下位～5層（3期）の3つに整理され、1～3期までそれぞれ近世・中世前半・縄文の文化期に相当するとされた。また、6層の上面において縄文時代後期のものと思われる土坑群が検出されている。1期のものとして陶磁器や金属器が出土したが、遺構は検出されなかった。2期のものとしては土師器や瓦器類が出土し、柱穴状遺構も検出されている。3期のものとしては縄文土器や石器が出土しており、柱穴状遺構や配石遺構、土坑が検出されている。

3期のものと考えられる柱穴状遺構と土坑は、縄文時代後期に位置付けられている。土坑は主にG・H区から検出されており、上面に配石を伴うものとそうでないものの2つのタイプが認められた。配石を伴う土坑は共伴する遺物から縄文時代後期初頭のものと想定されるが、性格は明らかにはされていない。また配石を伴わない土坑は、その周辺に土器とともに打製石斧・石鎌・石錘などの出土比率が高かったことから配石遺構とは異なる性格のものと考えられている。

3期は遺物から、中期・後期前葉・晩期に分けることができる。出土した土器には並木式土器、滑石混入土器といった九州系のものや、中津式土器などがある。

また、石ヶ坪遺跡に近接して流れる紙祖川の上流域に位置する中ノ坪遺跡では、並木式と同時期に



第2図 第1～3次調査区位置概念図

位置付けられる船元Ⅰ・Ⅱ式が出土しており、地理的にも石ヶ坪遺跡が何らかの影響を受けている可能性が考えられる（渡辺・栗田編 1999）。しかし、石ヶ坪遺跡においては船元Ⅰ・Ⅱ式土器は出土しておらず、逆に中ノ坪遺跡において並木式土器は出土していないということが指摘されている。このことから、並木式は船元式と併行するものではない可能性も考えることができよう。

本遺跡の立地や前回の調査区との関係等を明確にするためには周辺の測量図の作成が必要である。発掘作業と併行して周辺の測量を行なったが、第2次調査の後、遺跡周辺の地形が改変されており、過去の調査区と今回の調査区との位置関係を明確にするための基準点を見つけることができなかった。しかし、渡辺友千代氏の御協力によりおおよその位置関係を把握することができたため、概念図としてその位置関係を示しておく（第2図）。なお、測量図は現在作成中であり、本報告において掲載する予定である。

（中山 愉希江）

引用文献

- 渡辺友千代編 1990『石ヶ坪遺跡』匹見町教育委員会
- 渡辺友千代編 2000『石ヶ坪A遺跡』匹見町教育委員会
- 渡辺友千代・栗田美文編 1999『中ノ坪遺跡』匹見町教育委員会

第二章 調査の概要

1. 目的と経過

目的

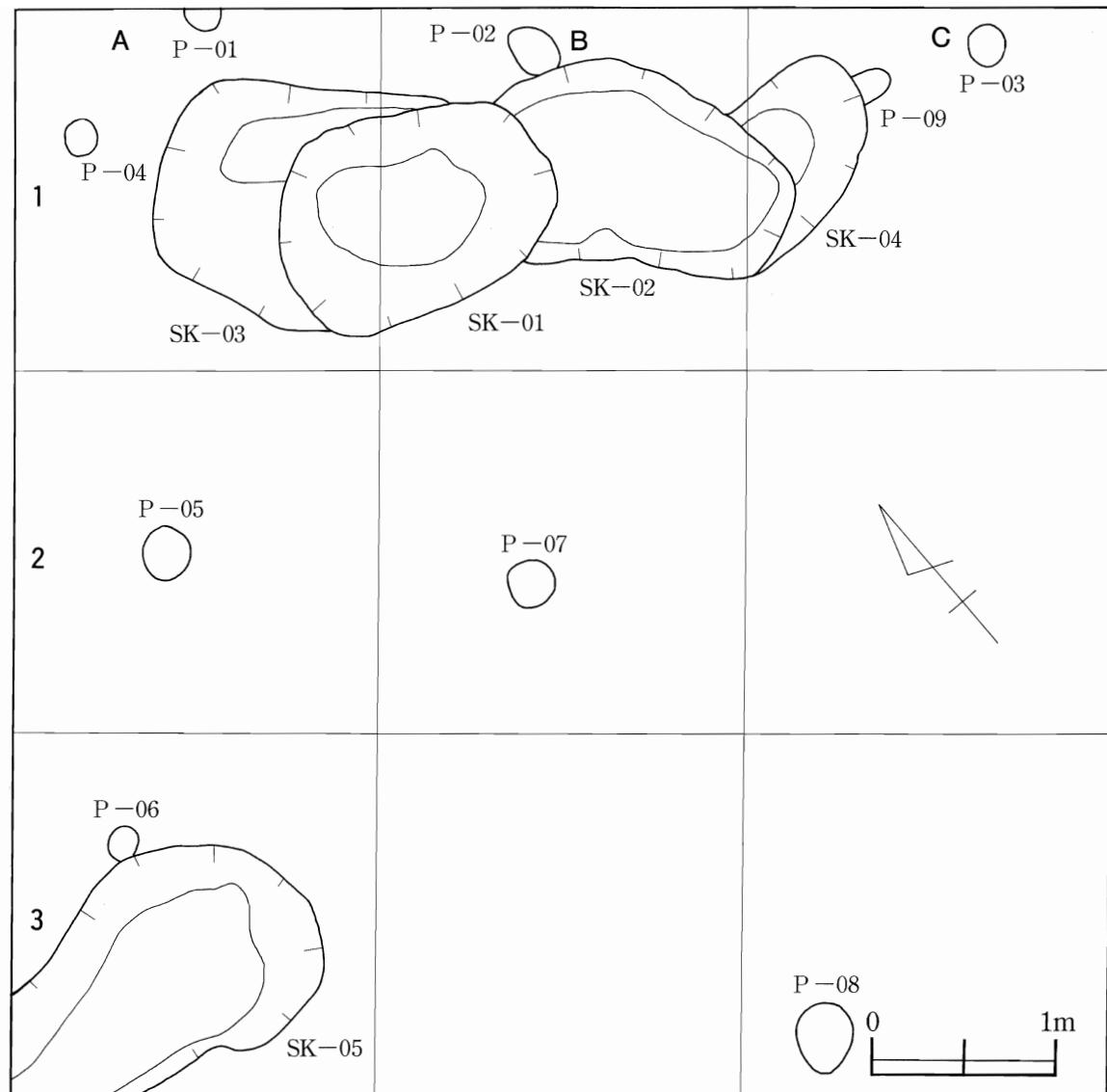
今回の調査の目的の一つは、九州系の縄文土器と中国地方の縄文土器との時間的な関係を明らかにすることである。前章で触れた石ヶ坪遺跡と中ノ坪遺跡での並木式土器と船元式土器の出土状況から、並木式土器は従来考えられている船元式併行ではない可能性があり、更に石ヶ坪遺跡では同一層内において、縄文時代後期前葉とされる多量の中津式土器に、少数ではあるが並木式・阿高式土器が伴出していることから、並木式土器は時期が下り、中期前葉ではなく中期中葉の土器である可能性が考えられている。同様に並木式に後続する阿高式も中期後葉に下る可能性が指摘されており、土器編年上の問題となっている（渡辺 2000）。以上から、今回の発掘調査はこれらの九州系土器と中国地方の縄文土器との共伴関係を明らかにすることを目的として行なった。

また前章で述べてきたように、石ヶ坪遺跡やその周辺の遺跡からは多くの配石遺構が検出されている。その性格としては、祭祀場や土坑墓などがあげられている。しかし、その用途が明らかになっているものは少ない。今回の調査では配石遺構内の土器がどのように分布しているのかを詳細に調べることにより、配石遺構の時期および性格を明らかにすることも主要な目的の一つとした。

経過

石ヶ坪遺跡第3次発掘調査は2001年8月20日から9月3日にかけて行なわれた。発掘地点は第1次調査の北側に位置する。発掘調査面積は6m×6mの36m²である。また、調査区を2m×2mのグリッドに分割し、北東側をA列、B列、C列とし、北西側を1行、2行、3行とした。これをもとにA-1区、B-3区などのグリッド名を付した（第3図）。

8月20日に機材搬入を行ない、22日にベンチマークおよび調査区を設定し、23日にA-1区から土坑を1基検出した。この土坑の平面プランを確認したところ、さらに数基の土坑が切り合っていることが確認できた。また発掘調査と併行して遺跡周辺の測量を行なった。24日にA-1区から検出された土坑をSK-01とし、またその土坑を精査中にさらに3基の土坑が切り合った状態にあることが確認できたため、B-1区から検出したものをSK-02～04とした。また、柱穴状遺構を3箇所から検出し、A-1区から検出したものをP-01、B-1区から検出したものをP-02、C-1区から検出したものをP-03とした。25日にA-3区から土坑を検出し、これをSK-05とした。また柱穴状遺構を4箇所から検出し、A-1区から検出したものをP-04、A-2区から検出したものをP-05、A-3区から検出したものをP-06、B-2区から検出したものをP-07とした。27日にSK-01の中にもう1基土坑が切り合っていることが確認され、これをSK-06とした。またC-3区から柱穴状遺構を検出し、これをP-08とした。28日にSK-01～04、SK-06の切り合い関係を検討した結果、SK-02とSK-04は同一のものであることが確認され、合わせてSK-02とした。31日にSK-01～03、SK-06の完堀作業中にC-1区においてSK-02に切られる形で土坑を1基検出し、これをSK-07とした。また同じくC-1区から柱穴状遺構1箇所を検出し、これをP-09とした。さらにA・B-1区においてSK-01・02・06・07に切られる形で土坑をもう1基検出し、これをSK-08とした。また



第3図 調査区および遺構配置図

SK-03は精査の結果、遺構ではないことが確認された。9月1日に現地説明会を行なった。2日には埋め戻し作業を行ない、3日に機材を撤収して今回の発掘調査は終了した。

調査後、整理の過程で遺構番号を変更し、最終的にはSK-06をSK-03、SK-07をSK-04とし、SK-08をSK-06とした。よってA-1区からC-1区までのあいだに、SK-01~04・06の計5基の土坑が切り合って存在したことが確認された。なおSK-06は大半が調査区外にあったため調査は行なっていない。また、今回の発掘調査ではP-01~09までの柱穴状遺構が検出されているが、調査の目的が配石遺構の用途を明らかにすることにあること、また第2次発掘調査で検出された中世前半期の柱穴と同様の性格のものと考えられたため、これらの柱穴は平面プランをとるのみにとどまり、図では土坑の形状を表すことを優先させた。

(和田守 加奈)

引用文献

渡辺友千代編 2000『石ヶ坪A遺跡』匹見町教育委員会

2. 基準土層

今回の調査においては、過去の調査の基準土層との対応関係を明確にすることが必要とされた。第1次調査での基準土層は、1層・耕作土（黒灰色粘質土）、2層・客土（石粒を含む、灰褐色土）、3層・暗褐色土（砂質性土層）、4層・黄褐色土（下位は明黄色砂土）、5層・黄色砂礫層（円礫を含む）、6層・黒褐色土の6層に分層されている。3層上層面からは集石遺構が、下層面からは住居跡が検出され、遺物包含層とされている。

第2次調査では、1層・耕作土層（1A明褐色土・1B暗灰色土に分層）、2層・客土（灰褐色小礫層）、3層（茶褐色土・酸化鉄の含浸による）、4層（暗褐色土）、5層（黒褐色粘質土）、6層（6A黄灰色砂質土、6B黄褐色砂質土に分層）、7層・河床礫（黄褐色砂礫層）の7層に分層されている。4層下位から5層にかけては特に土器や石器などの縄文時代の遺物が、6層の上面には遺構が検出されている。発掘の結果から、過去の調査における土層との対応関係および今回の調査の基準土層を示すと以下のようになる（第4図、図版3）。

1層：表土層である。Hue5YR3/2暗赤褐色土層。粒子は極小でシルト質を呈している。第1次調査、第2次調査の1層に対応する。

2層：耕作土層である。Hue10YR3/1黒褐色土層。粒子は極小で、やや強い粘性のシルト質を呈している。砂粒、小礫をやや含む。第1次調査、第2次調査の2層と対応する。

3層：耕作土面の床土である。Hue10YR5/8黄褐色土層。粒子は極小で、若干の粘性はあるが、ほぼ砂質に近い。層の中位を中心に全体的に酸化鉄の含侵がみられる。第1次調査での対応関係は報告書からは読み取ることができない。第2次調査の3層に対応する。

4層：今回の調査ではこの層の上面より遺構が検出されており、また遺物の多くも4層上面より出土している。Hue2.5Y4/6オリーブ褐色土層。粒子は極小で粘性ではなく砂質である。河原石や礫をやや多く含む。第1次調査の4層、第2次調査の6層に対応する。

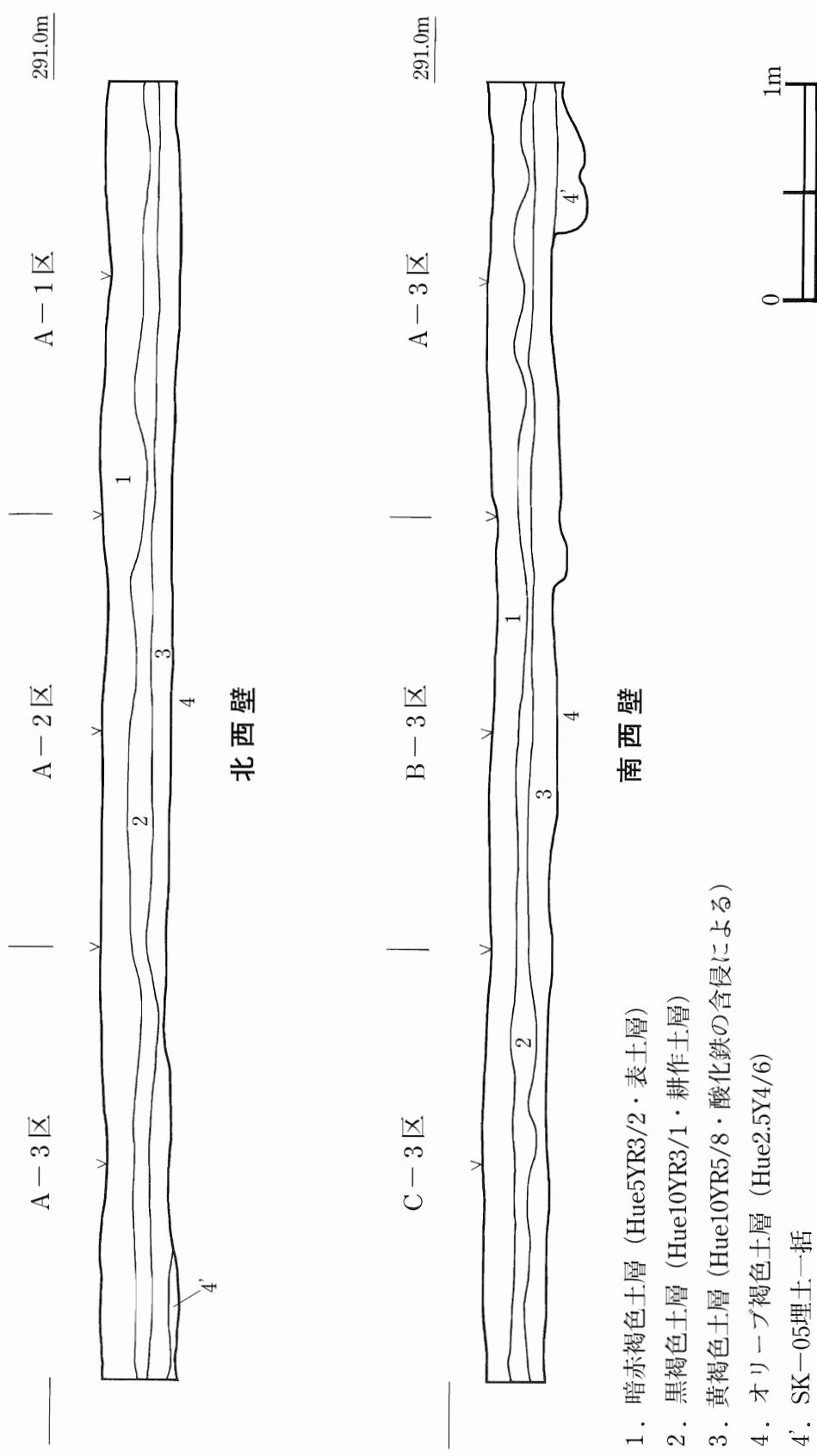
5層：河床礫層である。これはSK-01の底面に一部露出したのみであり、セクション図には出ていない。第1次調査の5層、第2次調査の7層に対応する。

今回設定した調査区では過去2回の調査区とそれほど離れているわけではないが、遺構検出面であり、主な遺物包含層である第1次調査の3層、第2次調査の4層・5層は、1～3層の耕作などによる攪乱により削平されており確認はできなかった。今回設定した4層の上層面も削平が確認されたために、検出遺構の上部構造は失われている。また過去2回の調査をふまえて4層以下は地山であると判断したためそれ以上の掘り下げは行なわなかった。

今回の調査区が広範囲におよばなかったためもあり、河川の氾濫、山地の崩壊土などによる攪乱の影響が見られず、比較的水平な堆積が確認され、容易な分層が可能であった。表記に関しては、北西壁、南西壁の交差地にSK-05がかかっており、その埋土を4'層としている。今回の調査において、過去の調査の遺物包含層が確認できなかったため、過去の基準土層との対応関係をさらに明確にして行くことが今後の課題として残されている。

（木下 哲仁）

第4図 調査区北西壁・南西壁セクション図



3. 遺構と遺物の検出状況

今回の調査では、遺構に関しては土坑6基、柱穴状遺構9箇所が検出された。柱穴状遺構に関しては、今回の調査で主たる対象とした時期とは異なるものと考えられるので、ここでは土坑および土坑内から出土した遺物を中心に記述することにしたい。

土坑は調査区の北東側に5基が切り合った状態で検出された。それぞれの土坑をSK-01～04・06と命名した。また調査区の西側でも土坑が1基単独で検出され、これを検出順に従いSK-05と命名した。このうちSK-01～05において調査を行ない、SK-06については大半が調査区外にあったため調査は行なわなかった。今回の調査区では後世の耕作によって遺構の上面は削られている。そのため、遺構の上部に配石遺構が存在するのかについては確認できなかった。

土坑より出土した遺物の総数は164点であり、その内訳は土器が132点、骨粉が22点、炭化物が10点である。土器の総数132点の内、土坑ごとに出土位置が確認できたものが47点あり、出土位置が確認できず、土坑調査時の廃土を5mmメッシュのふるいにかけることによって回収されたものが85点ある。ふるいにかけることによって回収された土器の内、SK-01とSK-03の廃土から回収されたものは15点、SK-02とSK-04の廃土から回収されたものは30点あった。SK-01とSK-03の廃土から回収されたものの内、図示できたものは第7図-14・28・30があり、SK-02とSK-04の廃土から回収されたものには第7図-7・19がある。以下、今回の調査で検出された土坑について詳述する。

土坑（SK-01～06）

SK-01（第5図、図版4～6）

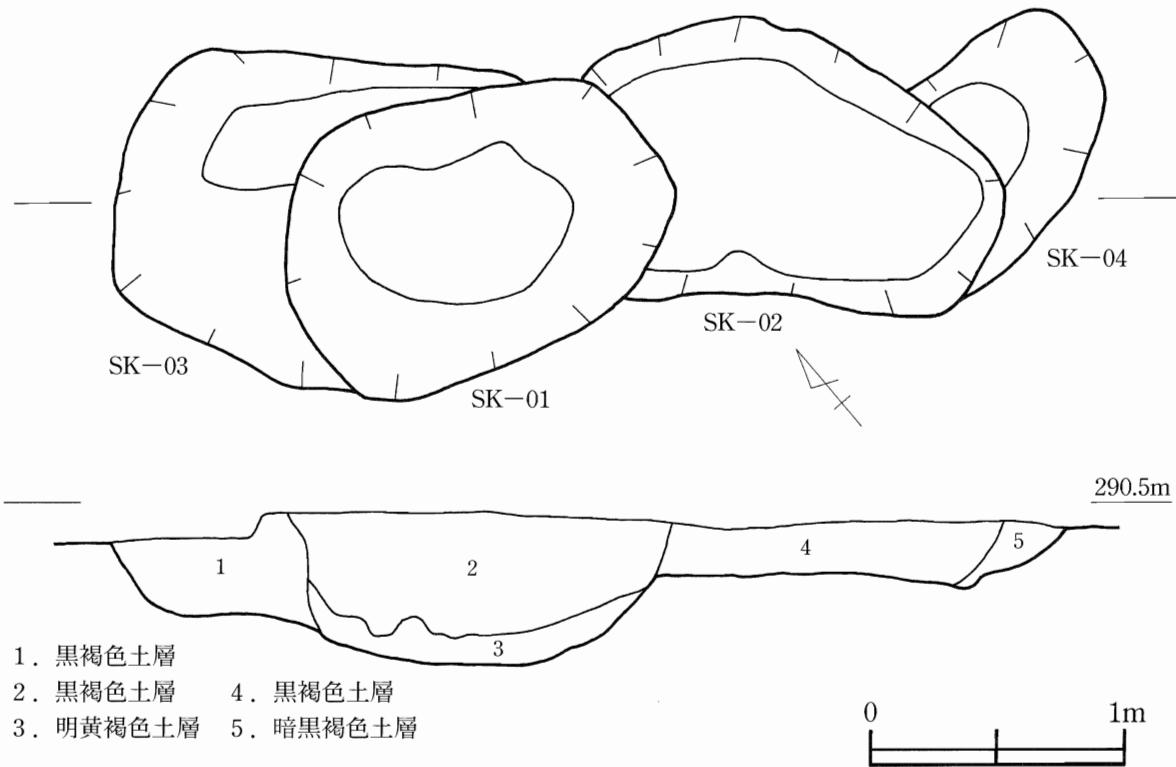
SK-01は、A-1区からB-1区にまたがる形で検出された。平面プランは楕円形で、北西側のSK-03と南東側のSK-02を切っている。土坑の長軸方向はN37°Wである。規模は、確認面で長軸長が約154cm、短軸長が約110cm、底面では長軸長が約88cm、短軸長が約56cm、深さは最深部で約60cmである。土坑壁の傾斜については、北西側は急な角度で掘り込まれている。南東側は比較的緩やかな角度で掘り込まれており、土坑壁の開き具合は30°から40°の間であった。SK-01の底面は4層のオリーブ褐色土層を掘り抜き、5層の河床礫層にまで達している。

本土坑からは今回の調査における土器総量の約1/5が出土しており、その他に微量の骨粉と拳大から15cmあまりの礫が少量出土している。埋土は2層からなっており、2は色調がHue7.5YR3/1の黒褐色の層で、砂粒は極小のシルトで、粘性がやや強く、小礫と黄土色のブロックがわずかに含まれる。3は、色調がHue2.5Y6/6の明黄褐色の層で、粘性のない砂質である。

出土した遺物の総数は45点で、その中で出土位置が確認できた土器は25点、骨粉は2点である。そのうち、図示できたものは第7図-4・6・11・12・21・26がある。出土した土器は、平面プランにおいては土坑の南東部に集中しており、出土レベルも比較的埋土上部に近い場所に集中している。骨粉は、SK-02付近から集中して検出されている。また、リン酸分析のために、SK-01の2層の下部でサンプリングを行なった。

SK-02（第5図、図版4～6）

SK-02はB-1区からC-1区にまたがる形で検出された遺構である。平面プランは不整楕円形で、北西側をSK-01によって切られ、南東側のSK-04を切っている。土坑の長軸方向はN65°Wである。規模はSK-01に切られているために明確ではなく、確認面と底面の長軸長は不明ではあるが、確認



第5図 SK-01~04遺構実測図

面の短軸長が約110cm、底面の短軸長が約84cm、深さは最深部で約24cmである。土坑壁の傾斜については、北西側はSK-01に切られているために不明であるが、南西側は比較的緩やかな角度で掘り込まれている。SK-02の底面はSK-01のように5層の河床礫層まで達することなく、その上部の4層のオリーブ褐色土層までしか達していない。

埋土は1層のみであり、少量の土器と微量の骨粉と拳大から15cmあまりの礫が土坑底面から浮いた状態で出土した。色調はHue10YR2/3の黒褐色、砂粒は極小のシルトであり、SK-01の2層よりも粘性がわずかに弱い。また、拳大から20cmあまりのやや大型の礫が底面に接した状態で出土している。

出土位置が確認できた土器は8点、骨粉は3点である。そのうち、図示できたものは第7図-27がある。出土した土器は、土坑の南東部から集中して出土しており、出土レベルも底面付近に集中している。骨粉は3点のみであるので確かなことは言えないが、3点のうち2点についてはSK-01に切られている付近から集中して出土しており、出土レベルでも底面付近に集中している。

SK-03（第5図、図版4～6）

SK-03はA-1区で検出された遺構である。平面プランは、南東側をSK-01で切られているために、はっきりした全体像はつかめないが、残存部から不整楕円形と思われる。土坑の長軸方向はN43°Wである。規模は、SK-01に切られているために明確ではないが、現状では確認面の短軸長が約130cm、底面の短軸長が約34cm、土坑最深部の深さは約45cmである。土坑壁の傾斜については、南東側はSK-01に切られているために不明であるが、北西側は比較的緩やかな角度で掘り込まれており、北西側の壁から土坑壁の開き具合は55°から65°の間になるものと考えられる。SK-03の底面はSK-01のように5層の河床礫層まで達することなく、その上部の4層のオリーブ褐色土層までしか達していない。

埋土は1層のみであり、土器と骨粉と拳大から15cmあまりの礫が少量出土した。色調はHue10YR2/3

の黒褐色であり、砂粒は極小のシルトで、SK-01の2層よりも粘性がやや弱い。また、小礫と黄色土のブロックがわずかに含まれている。

出土した遺物の総数は22点で、その中で出土位置が確認できた土器は4点、骨粉は8点、炭化物は2点である。そのうち、図示できたものは第7図-1・20がある。土器と炭化物については、平面プラン、出土レベルともに集中して検出されるという状況は見られなかった。骨粉については、平面プランにおいて北東側に集中していたが、出土レベルにおいては集中して検出されるという状況は見られなかった。SK-01と同様、リン酸分析のために、SK-03の底面付近でサンプリングを行なった。

SK-04（第5図、図版4～6）

SK-04はC-1区で検出された遺構である。平面プランは、西側をSK-02で切られているために、はっきりした全体像はつかめないが、残存部から不整楕円形と思われる。土坑の長軸方向はN80°Wである。規模は、SK-02に切られているために明確ではないが、現状では確認面の短軸長が約76cm、底面の短軸長が約42cm、土坑の最深部の深さは約35cmである。土坑壁の傾斜については、西側はSK-02に切られているために不明であるが、東側は比較的緩やかな角度で掘り込まれている。SK-04の底面はSK-01のように5層の河床礫層まで達することはなく、SK-02・03と同様に上部の4層のオリーブ褐色土層までしか達していない。

埋土は1層のみであり、微量の土器と拳大から15cmあまりの角礫と円礫が少量出土した。色調は暗黒褐色、砂粒は極小のシルトで、SK-01の2層よりも粘性がやや弱い。また小礫と黄土色のブロックがわずかに含まれている。SK-04の埋土の砂粒と粘性はSK-02のものと同質であるが、色調がSK-02より若干暗く、平面プランとセクションからSK-02にSK-04が切られていることが確認できたので、SK-02とSK-04を分けることができた。底面からは、拳大から20cmあまりの礫が出土している。

出土位置が確認できた土器は3点である。3点とも土坑の際から出土した。

SK-06

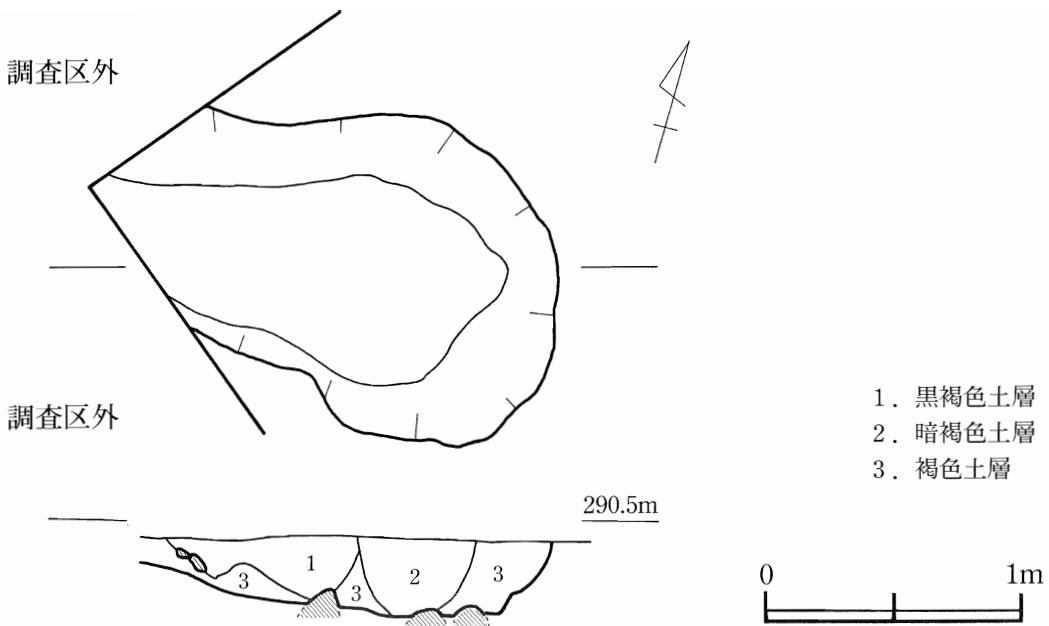
SK-06は、A-1区からC-1区にかけて、SK-01～03の北東側から検出された。平面プラン・規模は、土坑の大部分が調査区北東側の壁にかかり、不明である。また土坑の南西側はSK-01～03によって切られている。土坑内部については、大部分が調査区外にあったことから精査は行なわなかった。

（谷 洋一郎）

SK-05（第6図、図版6・7）

SK-05は、A-3区の西隅にかかる形で検出された。土坑の一部が調査区の壁にかかっているため正確ではないが、規模は確認面で長軸長約194cm、短軸長約114cm、底面では長軸長約158cm、短軸長約78cmで東側に広がる不整楕円形を呈し、深さは最深部で約32cmを測る。土坑の長軸方向はほぼ東西方向である。また土坑壁の傾斜は北側よりも、礫群がみられる南東側のほうが比較的緩やかである。SK-05の底面はSK-01のように5層の河床礫層まで達することはなく、SK-02～04と同様に上部の4層オリーブ褐色土層までしか達していない。

土層断面は3層に分層することができた。1は色調Hue10YR2/3の黒褐色シルト層であり、粒子がやや粗めの砂が混じり角礫を含む。また、粘性があり黄褐色シルトの細粒も混じる。2は色調Hue10YR3/3の暗褐色シルト層であり、黒褐色シルト層とほぼ同じ性質のシルト層だが、やや粘性が強い。砂の粒子はやや大きいが黄褐色シルトの細粒は混じらず、角礫を含む。3は色調Hue10YR4/4



の褐色砂質シルト層であり粘性が弱く、粒子は大きい。また角礫を含む。土層断面から掘り込みを確認することができたが、平面プランを明確にすることはできなかった。

埋土からは少量の土器と微量の骨粉、炭化物、拳大から20cmあまりの角礫や円礫が多量に検出された。南東側の土坑底面には拳大から30cmあまりの礫が多量に出土し、礫と礫の間には小礫や土砂が入っていた。これらの礫は4層に含まれるものと変わらないため、SK-05の底面は4層に掘り込まれていたものと考えられる。

出土位置が確認できた遺物としては土器7点、骨粉5点である。土器は全て小片であり、土坑の北東側から出土し、骨粉は土坑の北側から集中して出土した。礫群がみられる南東側からは骨粉や炭化物などは出土しなかった。炭化物は土器と同じく北東側から出土した。 (井上 志峰)

以上、遺構と遺物の検出状況について述べてきた。上述した以外に4層上面から20数点の土器が出土地点に関する特徴として、特に集中するなどのよう

なことは窺えなかった。

検出された土坑は、一定の空間を挟んでSK-01~04・06と、SK-05に大きく空間的に二分される。SK-01~04・06は1箇所に集中し、切り合うかたちで順次構築されていることがわかる。この点は本土坑群の性格を考えるうえで重要な属性となるものであろう。

土坑内から出土した土器のうち、同一個体と考えられるものが同じ、あるいは異なった土坑から出土している場合がある。それらは第7図で示されている、11と12（ともにSK-01）、21（SK-01）と20（SK-03）、26（SK-01）と27（SK-02）である。11に関しては、SK-01出土の土器とB-1区の4層上面から出土した土器が接合したものである。また同一土坑内で出土し、実際に接合したものには、SK-01から出土の土器2点が接合した4と、図示できなかったが同じくSK-01から出土の土器片が接合した土器1点がある。これらの点については考察で解釈を行ないたい。 (山根 航)

第三章 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、陶磁器5点、土器167点、石器11点、その他に炭化物や骨粉がある。土坑内から出土した遺物には、位置が確認できたものと廃土をふるいにかけて取り上げたものがある。この他、4層上面から出土したものの中には、グリッドごとに一括で取り上げたものがある。出土遺物の大部分は縄文土器であり、ほとんどが細片であった。したがって、ここでは比較的残りのよい縄文時代の遺物を中心に記述する。なお、時期的な問題については第四章の考察において述べることとする。

1. 縄文土器（第7図、図版8・9）

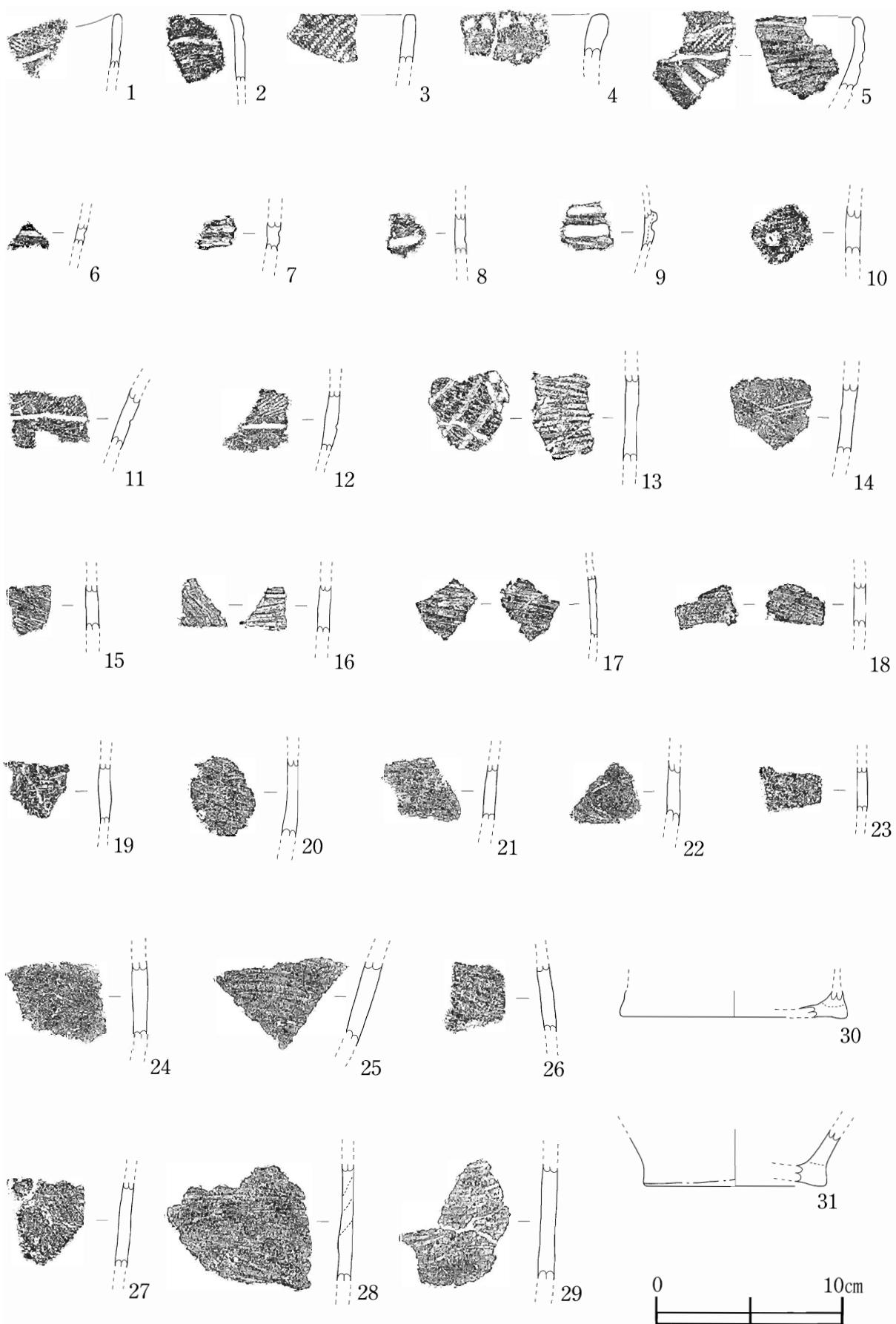
SK-01から4・6・11・12・21・26が、SK-01とSK-03の廃土から14・28・30が、SK-03から1・20が出土している。SK-02からは27が、SK-02とSK-04の廃土から7・19が出土している。SK-05からは8・10・16～18・23が出土している。この他に4層上面から2・3・11・13・15・22・24・25・29・31が、廃土中から5・9が出土した。4はSK-01から出土した2片が、11はSK-01から出土したものと4層上面から出土したものが、29は4層上面から出土した3片が接合したものである。以下、各土器について順に記述する。

口縁部

1は波状口縁の頂部付近のものである。単節のRL縄文と沈線文による文様帶が波状の口縁に沿ってめぐるものと思われる。内器面はナデ調整が施されている。胎土中には2mm程度の石英や長石が含まれ、色調はにぶい黄色を呈している。2は口唇部がやや内側に肥厚するものである。やや不整な沈線文が外器面に施され、内外器面ともにナデが施されている。胎土中には1mm以下の長石が含まれる。色調は灰黄色を呈している。3は外器面に単節のLR縄文が施されているものである。内器面や口唇部の平坦面にはヨコナデ調整が施され、外器面の口唇部付近にもナデが施され縄文も一部消されている。胎土中には2mm程度の石英や長石が含まれている。色調は暗灰黄色を呈している。4は口唇部に刻目状のものがみられるもので、指か棒状工具の側面で「ハ」の字状に施されたものである。内外器面ともにナデで調整されている。胎土中に1mm程度の長石を含み、色調はにぶい黄褐色を呈している。5の外器面には単節のLR縄文と沈線文が施されている。また、縄文帶の上にさらにやや不整な沈線文が施されている。内器面には下部にケズリ状のナデが、上部にヨコナデが施されており、口唇部がつまみあげるようにしてつくり出されている。胎土中には2mm程度の石英や長石が含まれ、色調はにぶい黄褐色を呈している。

胴部（有文）

6は浅めの沈線文をもち、内外器面はナデで調整されている。胎土中には極小の長石が含まれ、色調はにぶい黄褐色を呈している。7は外器面に横走する沈線文が施されるもので、内器面に粗い条痕がみられ、凹凸が残される。色調は灰黄色を呈している。8は磨滅が著しいが外器面に沈線が施されるものである。胎土中には1mm程度の石英が含まれ、色調はにぶい黄褐色を呈している。9は外器面の粘土を貼り付けられた部分に横走する沈線文が施されたもので、沈線内には工具を一時的に止めた

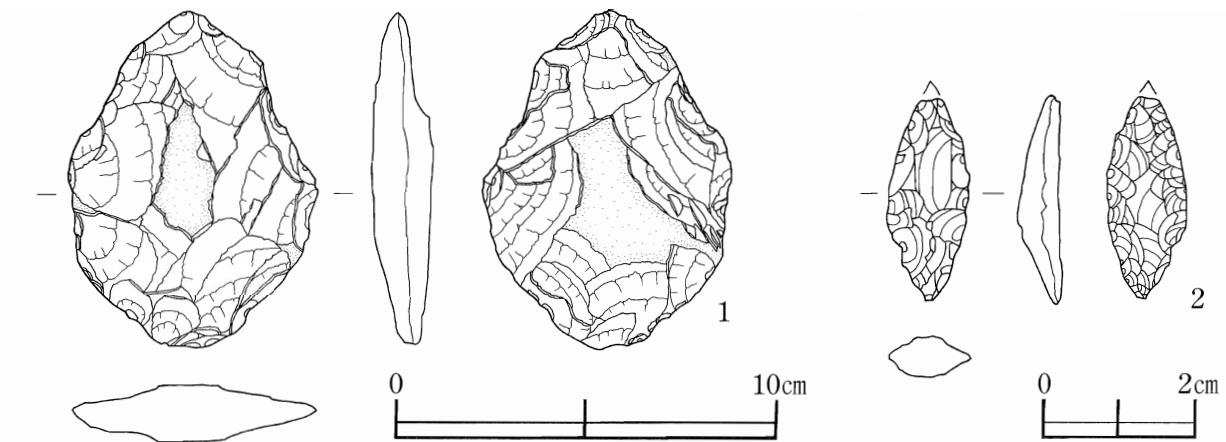


第7図 出土土器実測図

痕がかすかにみられる。内外器面ともにナデで調整されている。胎土中には1mm程度の長石が含まれ、色調は暗灰黄色を呈し、一部に褐鉄鉱の付着がみられる。10は磨滅が著しいが外器面の一部に単節のRL縄文が確認できるものである。胎土中に2mm程度の石英や長石が含まれ、色調はにぶい黄褐色を呈している。11は外器面が磨滅しているが貝殻腹縁文や沈線文がみられるものである。内外器面ともにナデで調整されている。胎土は1mm程度の石英や長石を含み、色調はにぶい黄褐色を呈している。12は貝殻腹縁文が二段に重ねられ、その下部に沈線文が施されたものである。内外器面ともにナデで調整されている。胎土中には2mm程度の石英や長石が含まれ、色調はにぶい黄褐色を呈している。11と12は、施文や調整や胎土から同一個体と考えられる。13の外器面にはやや不明瞭な条痕の後に交差する沈線文が施され、一部深く刺突されたものもみられ、内器面は明瞭な二枚貝条痕が施されている。胎土中には3mm程度の長石が含まれている。色調は黒色を呈し、褐鉄鉱が付着している。

胴部（無文）

14は外器面に二枚貝による条痕を残したもので、内器面はナデで調整されている。胎土中には2mm程度の石英や長石が含まれる。断面には黒化層がみられ、色調は明黄褐色を呈している。15は外器面に条痕がみられ、内器面はナデで調整されている。色調はにぶい褐色である。16は内外器面ともに条痕がみられるが、内器面のほうがより明瞭に残っており外器面は痕跡をとどめる程度である。色調はにぶい黄色を呈している。17の外器面は磨滅が著しく調整が不明瞭ではあるが条痕かと思われ、内器面は粗いナデが施されている。色調は黄褐色を呈している。18は内外器面ともにナデで調整されているものである。胎土中には極小の長石が含まれる。色調は灰黄褐色を呈している。19は内外器面ともにナデ調整が施されるが全体に不整で、外器面には粘土を貼り付けたような痕が残されている。胎土中には2mm程度の石英や長石が含まれ、色調はにぶい黄褐色を呈している。20は内外器面ともにナデで調整されているものである。胎土中には1mm程度の石英や長石が含まれる。断面には黒化層がみられ、色調はにぶい黄褐色を呈している。21は内外器面ともにナデで調整されている。胎土中には1mm程度の石英や長石が若干含まれ、色調はにぶい黄褐色を呈している。20と21は調整や胎土から同一個体と考えられる。22は内外器面ともにナデで調整されている。胎土中には2mm程度の長石が含まれる。断面には、かすかに黒化層がみられ、色調は浅黄色を呈している。23の内外器面は磨滅が著しく調整は不明である。胎土中には1mm程度の長石が含まれ、色調はにぶい黄褐色を呈している。24の外器面は風化が激しく調整は不明であり、内器面はナデ調整がみられる。胎土中には2mm程度の石英や長石が含まれ、断面には黒化層がみられる。色調はにぶい褐色を呈している。3と24は縄文の有無という差はあるが、胎土や色調や調整から同一個体の可能性がある。25は内外器面ともにナデで調整されているものである。胎土中には2mm程度の石英や長石が含まれる。断面には黒化層がみられ、色調は煤が付着し黒色を呈している。26の内外器面は磨滅が著しく調整は判然としない。胎土中に1mm程度の石英や長石を含み、色調はにぶい黄褐色を呈している。27は内外器面ともにナデで調整されているものである。胎土中には2mm程度の石英や長石を含み、色調はにぶい黄褐色を呈している。26と27は調整や胎土や色調から同一個体と考えられる。28は内外器面ともにナデで調整されているものである。胎土中には2mm程度の長石が含まれる。断面には黒化層がみられ、色調は明黄褐色を呈している。29は内外器面にはともにナデが施されている。胎土中には2mm程度の石英や長石が含まれる。断面に黒化層がみられ、色調はにぶい黄橙色を呈している。外器面に一部煤が付着している。



第8図 出土石器実測図

底部

30は復元径の1/8ほどが残存しているもので、内外器面ともにナデで調整されている。胎土中には2mm程度の石英や長石が含まれ、色調は明褐色を呈している。31は復元径の1/6ほどが残存する上げ底のものであり、断面に明瞭な接合痕を残す。内外器面とともに粗めのナデ調整が施され、接合部分には粘土をなでつけた痕も残る。胎土中には3mm程度の長石が含まれる。色調は浅黄色を呈している。

2. 石器（第8図、図版9）

1・2とも表土層から出土したものである。

1は打製石斧である。一部自然面を残しながらも、両面を加工して整形している。全体的に磨耗しているが、基部付近は刃部近くより比較的磨耗の度合いが小さい。これは基部付近が何らかの装着物によって覆われていたことを想像させるものである。2は基部が尖り、二等辺三角形状の鎌身をもつ石鎌である。縁辺は押圧剥離によって丁寧に整形されている。

この他に表土層から8点の剥片が出土しており、そのうち2点は姫島産の黒曜石である。その他のものは安山岩製であり、押圧剥離による石鎌の未製品や台形の楔形石器がみられる。これらは2cmの大の小形で薄めの剥片であり、このような剥片から2の石鎌も製作されたと考えられる。

3. その他の遺物

これらの他に表土層から中近世の陶磁器や擂鉢などが出土している。これらは決して大きな破片でもなく、また今回の調査の主眼からそれることにもなるので図示はしなかった。また、第二章で述べたように、土坑内からは多くの炭化物や骨粉を取り上げた。しかし、それらは微小な細片であり具体的な種別を確認できるものではなかった。

(厚見 崇)

第四章 考察

1. 検出遺構について

SK-01～04

SK-01～04の新旧関係については、土坑の切り合いから構築順にSK-04→SK-02→SK-01となり、またSK-03→SK-01となる。SK-03とSK-04、SK-02とSK-03それぞれの新旧関係は、両者の間に土坑の切り合い関係が存在しないため不明である。しかしSK-01とSK-02、SK-01とSK-03からは、それぞれ同一個体と考えられる土器が出土していることから、土坑群の構築期間はそれほど長い間であったと考えにくく、ある程度限られた時間幅の中で連続的に構築されたことが考えられる。

SK-01～04からは、土坑の性格を考えることのできる遺物があまり出土していないため、遺物からその性格を判断することは難しい。そこでここでは、土坑の形状を中心として土坑の性格を考えていこうと思う。縄文時代の土坑の性格としては、土坑墓、貯蔵穴、炉、落とし穴などがあげられる。まずは、炉についての可能性を考えてみると、島根県下ではこの石ヶ坪遺跡でしか土坑の底面から焼土が検出された例はなく、また板屋Ⅲ遺跡（角田編 1998）や藏小路西遺跡（足立編 1999）や日脚遺跡（川原・丹羽野編 1985）などで、屋外炉が検出されているが、そのいずれにも土坑を伴っていない。加えてSK-01～04において、底面から焼土が検出されていないことからみて、これらの土坑が炉である可能性はまずないと考えられる。次に落とし穴の可能性についてだが、底面に柱穴状のピットがあったり、土坑壁の中間部がしづんだり、底面付近の幅が狭い溝状を呈したり、円形で深さが異常に深いといった特徴をSK-01～04がもたないこと、さらに島根県下で発見された落とし穴は、縄文時代の草創期から早期にかけてのものが多く、今回の事例とは時期が異なることからみて、本例が落とし穴である可能性も低いと考えられる。これらのことからSK-01～04の性格は、土坑墓と貯蔵穴のどちらかにしづられるだろう。以下、土坑墓と貯蔵穴の可能性について、SK-01～04を個別に見ていくことにしよう。

SK-01では出土した骨粉と土器がSK-02側に集中している。骨粉の中にはヒトの歯であると考えられるものがあり、土坑墓の可能性が考えられる。土坑墓の場合、骨粉が東側に集中しており、人骨の中で最も遺存しやすい部分が頭蓋であることから、遺体の頭位方向が東側であったのかもしれない。しかし、埋土が分層できることと、壁が外側に30°から40°ほど開くことから、炭化物は検出されていないものの、貯蔵穴の可能性も捨てきれない。

SK-02は土器と微量の骨粉しか検出されていないが、土坑の立ち上がり具合が検出面より上部でさらに急になることが考えられ、その場合、壁の開き具合からして貯蔵穴と考えることもできる。短軸長が約110cmと貯蔵穴にしては大きいように思われるが、内容物が判明している匹見町のヨレ遺跡（渡辺 1993）では短軸長が100cmを超えるものも含まれていることからみて、SK-02が貯蔵穴であると考えても、規模的には問題はないようと思われる。SK-02の骨粉の2点はSK-01との際で検出されたものであり、際以外の骨粉は土坑の中央で検出された。これに対して、SK-01の骨粉はSK-02側で集中して出土しているため、SK-01との際で検出されたSK-02の骨粉は、SK-01のものと考えることもできる。しかし、平面形を見る限り、楕円形を呈していることからみて土坑墓である可能性も

また高いと思われる。

SK-03はわずかに土器、骨粉、炭化物を出土しているのみであり、集中した分布も示してはいなかった。埋土に分層が見られなかつことと、深さが約26cmと浅いことが後世の削平によりとばされたと考えるならば、壁の立ち上がり方、炭化物の検出などからみて、貯蔵穴の可能性も考えられる。その場合、骨粉は人骨ではなく、獸骨起源のものと考えることもできる。骨粉と炭化物が同じ土坑内から出土するという状況は石ヶ坪遺跡の第1次調査（渡辺編 1990）と第2次調査（渡辺編 2000）では発見されていなかつことであり、島根県下でも同じ匹見町内のヨレ遺跡と中ノ坪遺跡で発見されているだけである。しかし、墓域内において焼土、炭化物などが人骨に伴出するような事例は、岡山県彦崎貝塚（池葉須 1971）、津雲貝塚（清野 1920）などでしばしば確認されており、本例が土坑墓である可能性も否定できない。

SK-04は土器が3点しか確認されていないが、土坑の深さ、壁の開き具合、埋土の性質などがSK-02と大変酷似している事から、SK-02と同様の性格が考えられる。

SK-01～04は土器、骨粉、炭化物ともに極めて小さな破片であることから、土坑の性格をはっきりと述べることができない。しかし、上述したようにそれぞれの土坑は土坑墓ないしは、貯蔵穴である可能性を考えることができる。この場合、SK-01～04の場所を執拗に掘り返しているということも、土坑墓ないしは、貯蔵穴という観点から説明が可能である。本遺跡の土坑群の類例としては、同じ匹見町内のイセ遺跡（矢野 1993）の事例が挙げられよう。イセ遺跡からも骨粉が出土しており、報告書によれば土坑墓の可能性が指摘されている。現時点では、土坑墓であるのか貯蔵穴であるのか明確な判断は下すことはできないが、今後実施する予定であるリン酸分析の結果を踏まえて、本報告で再検討を行ないたい。

（谷 洋一郎）

SK-05

SK-05からの出土位置が検出できた遺物は検出状況で述べたように、すべて土坑の北側と北東側からのものであり、南側からは出土していない。礫群は遺物が出土していない南側の基底面に集中し、そこに人為的なものは感じられなかつた。また、しばしば貯蔵穴にみられる覆いや押さえとしての礫（谷岡編 1990、近藤編 1995）の可能性も考えられるが、貯蔵穴における礫の場合、基底面近くにあるのは少なくその大部分は埋土中などに散在している（谷岡編 1990、近藤編 1995）。さらに炭化物もわずかに出土してはいるが、貯蔵穴と断定するようなものでもなく、坑形も貯蔵穴にはあまりみられない。炉としてもそれを示すような焼土や焼石などは確認できず、断面においてもこのSK-05は急で深いように思われる。

土坑墓としての可能性を考えてみると、土坑からは骨粉が少量ではあるが出土しており、こうした骨粉の出土例は他に、この石ヶ坪遺跡近くのイセ遺跡でもみられる。そこでは縄文時代後期の4基の土坑から出土しており、土坑の際や礫の近くで確認されている。また、いずれの土坑も礫が多量に出土しており、4基の土坑のうち2基は墓、残りの2基は祭祀遺構の可能性が示されている（矢野 1993）。この他にも骨粉ではないが、骨片が出土している遺跡としては石ヶ坪遺跡（第1次調査）、ヨレ遺跡、水田ノ上A遺跡、中ノ坪遺跡がある。ヨレ遺跡では配石下に土坑をもつものや通常の土坑から骨片が出土しており、縄文時代後期後葉から晩期前半における通常の土坑のなかには、墓坑的なものが存在する可能性の高いことが指摘されている（渡辺 1993）。また、水田ノ上A遺跡では3つの配石遺構と

1基の土坑から骨片が出土しており、そのうち土坑を伴う2つの配石遺構において墓坑の可能性が示されている。ただしこのSK-05の場合、貯蔵穴にみられる動物の骨（江本編 1988）の可能性も考えられるため慎重を要すが、坑形や断面形、土坑規模、骨粉などから考えると貯蔵穴や炉よりも土坑墓としての可能性の方が高いように思われる。とりわけ土坑の規模に注目してみると、このSK-05は長軸長194cm以上、短軸長約114cmを呈しており土坑墓（伸展位単独葬）の範囲内に収まる（前田 2000）。ゆえに埋葬姿勢は伸展葬であった可能性が高く、土坑の長軸から頭位方向は西か東であったと考えられる。この石ヶ坪遺跡の周辺で、おおよそこうした範囲に収まる骨片や骨粉を出土した土坑としてはヨレ遺跡で1基、イセ遺跡で2基、中ノ坪遺跡で2基を数える。ただし、これらの遺跡で出土した骨片などは人骨か動物の骨か不明なため、すべてを土坑墓として考えるのには問題があるが、伸展葬が中四国地方で確認されるのは縄文時代後期前葉以降であり、縄文時代早期～中期の中ノ坪遺跡を除いては時期的に問題はない。

さらにこのSK-05は検出状況でも述べた通り、掘り返したような状態が土層断面から確認できた。これを掘り返しと考えるならば、SK-05は複葬を行なった可能性も出てくる。そこでまず、中四国地方での複葬の事例をみてみると岡山県彦崎貝塚の焼骨葬、広島県帝釈寄倉岩陰遺跡の多人数集骨葬、同県帝釈猿神岩陰遺跡の少人数集骨葬、山口県神田遺跡の少人数集骨葬などが確認されている（設楽 1993）。岡山県の事例以外は、すべて縄文時代後期のものである。

SK-05を複葬と考えた場合、一次葬の後の骨上げを行なった際の残余骨が、出土した骨粉でありSK-05は一次葬時の土坑墓であるとするパターンと、一次葬後に骨上げを行ない、骨を土器棺に納める土器棺再葬のパターン、また土器棺に納めない土坑埋納のパターンを考えられる。しかし、土器棺再葬の場合、円形土坑に土器棺を納入するが多く、SK-05のような形態の土坑に納入する例は少ない。また土器もあまり出土していないため、土器棺再葬の可能性は低くなる。そうすると、一次葬における土坑墓のパターンか土坑埋納のパターンが残るが、これを判断することは困難であり、どちらかは不明といわざるを得ない。また、SK-05は2回ほど掘り返された状態が窺えられるが、2回目の掘り返しも複葬に関わるものなのかは、平面プランが確認できなかったこともあり判断しがたい。いずれにせよSK-05は、伸展葬の一次葬後に骨上げを行ないそのまま廃棄された、もしくは再び土坑埋納を行なった、複葬の可能性をもつ土坑と考えられる。

(井上 志峰)

2. 出土土器の年代的位置付け

今回の調査で取り上げた土器はそのほとんどが細片であり、実測に堪えうる資料は図に示したもの程度しかなかった。図示したものは粗製のものが多く、縄文時代晚期前半を中心とするものである。

しかしながら晚期よりさかのぼるものもみられる。第7図-3は外器面に縄文が施されており、第7図-1・5のように磨消縄文がみられるものもある。第7図-11・12は同一個体と考えられるが、おそらく沈線で区画される範囲に貝殻疑似縄文を持つものである。

縄文時代晚期のものの中で、第7図-9は深めの沈線文を数条施されたもので、縄文時代晚期初頭の浅鉢にみられるものであると考えられる（角田編 1998）。この他の文様をもたない粗製のものは縄文時代晚期のものと考えられる。

石ヶ坪遺跡では、過去の調査において縄文時代中期～後期を中心として、一部縄文時代晚期のもの

を含む土器が出土している（渡辺編 1999・2000）。しかし、今回の調査では並木式や阿高式といった本遺跡を特徴づける土器は出土しなかった。この点に関しては過去の調査と照らし合わせると、今回の調査地点が本遺跡の縁辺にあたることが要因として考えられる。

(厚見 崇)

引用文献

- 足立克己他編 1999『蔵小路遺跡』島根県教育委員会
池葉須籐樹編 1971『岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告』
内田律雄編 1996『門遺跡』島根県教育委員会
江本直編 1988『曾畠』熊本県教育委員会
角田徳幸編 1998『板屋Ⅲ遺跡』島根県教育委員会
川原和人・丹羽野裕編 1985『日脚遺跡』島根県教育委員会
清野謙次 1920「備中國浅口郡大島村津雲貝塚人骨報告」島田貞彦・清野謙次・梅原未治編『備中津雲貝塚発掘報告』京都帝国大学文学部考古学研究報告第五冊
近藤正編 1969『寺ノ脇遺跡』島根県文化財愛護協会
近藤義郎編 1995『南方前池遺跡』山陽町教育委員会
設楽博己 1993「縄文時代の再葬」『国立歴史民俗博物館研究紀要』第49集国立歴史民俗博物館
第28回山陰考古学研究集会事務局編 2000『山陰の縄文時代遺跡』第28回山陰考古学研究集会事務局
谷岡陽一編 1990『栗谷遺跡発掘調査報告書Ⅲ』福部村教育委員会
前田清彦 2000「埋葬人骨からみた伊勢湾東岸地域の晩期墓制」『第2回関西縄文文化研究会関西の
縄文墓地—葬り葬られた関西縄文人—発表要旨集』関西縄文文化研究会
矢野健一 1993「イセ遺跡」渡辺友千代・矢野健一編『ヨレ遺跡・イセ遺跡・筆田遺跡』匹見町教
育委員会
渡辺友千代 1993「ヨレ遺跡」渡辺友千代・矢野健一編『ヨレ遺跡・イセ遺跡・筆田遺跡』匹見町
教育委員会
渡辺友千代編 1990『石ヶ坪遺跡』匹見町教育委員会
渡辺友千代編 2000『石ヶ坪A遺跡』匹見町教育委員会

第五章 まとめ

最後に今回の調査の成果を簡単にまとめ、今後の課題と展望を明確にしたいと思う。今回の調査目的は以前の調査を踏まえたうえで、配石遺構を詳細に調査し、その性格を解明することにあった。また、縄文時代中期前葉から中期中葉の時期における、九州地方の縄文土器と、中国地方のそれとの共伴関係を明らかにすることも目的の一つとしていた。こうした問題を解明するため発掘調査において、礫の検出の際には細心の注意を払い、その状況を観察し、出土した土器についてもその出土位置、出土状況を押さえるという精密な調査を行なった。そのため、調査区は6m×6mという小規模な範囲でしか行なうことができなかつたが、その結果は今後の研究へつながるものである。

今回の調査区は第1次調査区から北へ約7mに位置し、そこから東へ約6m進めば、第2次調査区へぶつかる地点である。にもかかわらず、第1・2次調査の堆積状況とは異なり、過去の調査で検出された遺物包含層が失われていることが明らかとなった。その原因は言うまでもなく耕作によるものだが、今回の調査区のように場所によっては遺物包含層、遺構面にまで削平がおよんでいることが明らかとなった。

調査の結果、検出した遺構としては土坑が6基、柱穴状遺構が9箇所である。そのうち土坑5基を精査した。それらの遺構は、削平により本来の掘り込み面よりも低い位置での検出と考えられる。したがって土坑に関しては、過去の調査例から考えると、その上部構造として配石が存在していた可能性もあるが、遺構検出面の4層上面において、土坑周辺で原位置を保っていると考えられる礫は今回の調査では発見できなかった。

完掘した5基の土坑の性格については、上部構造が失われていることから、平面プラン、土坑壁の立ち上がりなどの下部構造、埋土から出土した炭化物、骨粉などを手がかりに分析を進めた。また周辺地域で発見されている土坑との比較を行ないつつ、貯蔵穴、土坑墓、炉跡、落とし穴といった現段階で考えられる土坑の性格について検証してみた結果、調査区北東に位置するSK-01～04に関しては、土坑墓の可能性が高いと思われる。土坑内から骨粉が出土していることも、これらの土坑群が墓であるということを支持するものである。これらの土坑墓の時期は、出土した土器から縄文時代晩期前半頃だと思われるが、短期間の内に何度も切り合うような形で、墓を構築するような方あるいはいわゆる埋葬小群と重ねて考えることができると思われる。全国的にみてもこのように切りあいの多い土坑墓群は珍しく、今後の墓制研究において、一石を投じるものとなるだろう。ただし、これらの土坑が貯蔵穴である可能性も決して否定できるものではなく、今後リン酸分析などの結果を踏まえて再検討をする必要がある。

SK-05については断面において数回の掘り込みが確認できたものの、平面プランではその明確な切り合い関係は明らかにできなかった。構築時期は、埋土中から出土した土器片より縄文時代晩期前半頃と考えられるだろう。土坑の規模、形態、埋土の状況、そして骨粉の出土から、SK-01などと同様に土坑墓であり、頭位方向を東あるいは西に向ける伸展葬の可能性が高いとされ、数回掘り返しているという観察所見については、SK-05に複葬行為があった可能性を示すものと調査担当者は述べている。しかし、中国地方においては伸展葬の類例があまりないこと、全国的にみても複葬時の一次葬の場所が検出された例はほとんどないことなどからみる限り、ネガティブな印象は

ぬぐいがたい。今後より一層の検討が必要であろう。

遺物としては、細片が多数を占めていたものの縄文土器、陶磁器、石器、炭化物、骨粉などが出土した。残念ながら、調査の目的の一つであった、九州地方の縄文土器、阿高式・並木式と中国地方の縄文土器との時間的な関係について分析できるような資料を発見することはできなかった。また、出土した土器は細片の資料がほとんどで、型式が比定できるものも少なかった。その意味では、遺物に関して良好な資料を得ることができなかつたといえるであろう。これについては、今後の調査に期待したいと思う。また、第1・2次調査で指摘されていた本地域と九州地方との関係は、姫島産黒曜石の剥片が少量ではあるが出土していることにより、改めて確認できたと思う。

以上に述べたように、今回の調査では配石遺構および縄文土器遺物包含層を検出することができなかつた。以前の調査とは異なつて、九州系の阿高式・並木式土器が出土しなかつたことから考えて、今回の調査区は石ヶ坪遺跡の中心部から外れた縁辺部にあたると考えられる。

今後の課題としては、まず良好な包含層をみつけること、遺存状態の良い遺構をみつけることに尽きると思う。来年度以降の発掘調査に期待したい。

この石ヶ坪遺跡の調査は、三年計画の予定であり、今回はその第一回目の調査であった。炎天下の中、豪雨の中あるいは教官の怒声の中、今回の発掘調査はなにもかも初めての事が多く、私たち学生にとっては試行錯誤の連続であった。しかし、じっくり時間をかけて一つの遺構を調査することの意味が理解でき、その成果を報告書の作成に反映させることができが今後の研究生活にとっていかに重要なことであるか、肌身をもって感じることができたと思う。その意味では、今回の発掘調査は遺物の出土量は確かに少なかつたとはいえ、私たちにとって非常に大きな収穫であった。概報の作成に入ってからも、製図や文章の作成など普段の学生生活とはまた異なつた緊張状態が続き、何度も作業のやり直しをしなくてはならなかつたが、こうしたことも報告書を出すことがいかに大変であるか、改めて考える良い機会となつた。

そうしたなか、匹見町役場の方々をはじめ、遺跡や宿舎周辺の住人のみなさんからは温かいご支援、ご協力をいただき、大変感謝をしている。この恩恵に報いることができるかどうかは今後、我々学生の成長如何にかかっているが、まずは本概報を刊行することによって、より一層のご指導、ご教示をいただきたいと思う。

(山根 航・樋口 英行)

図 版

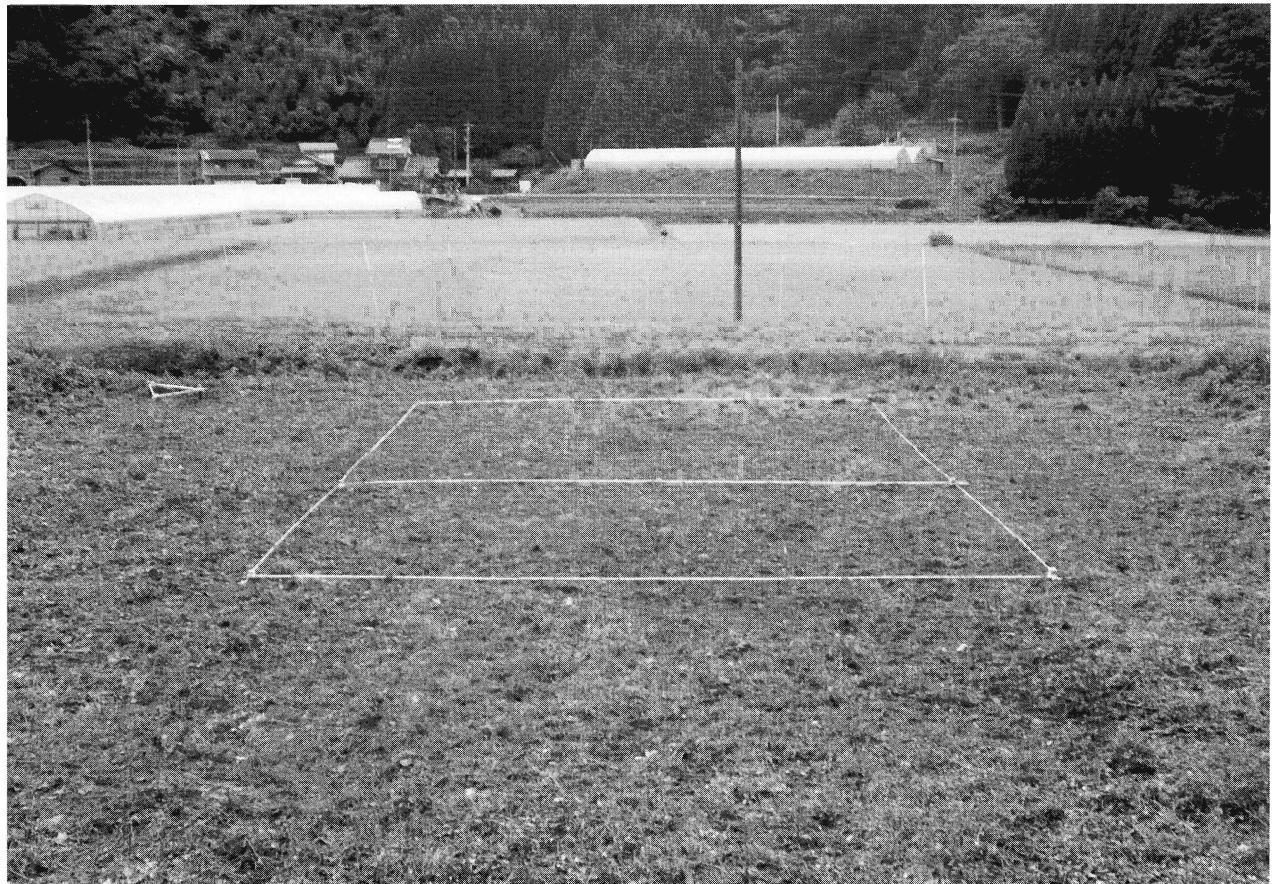


遺跡遠景（北側より）

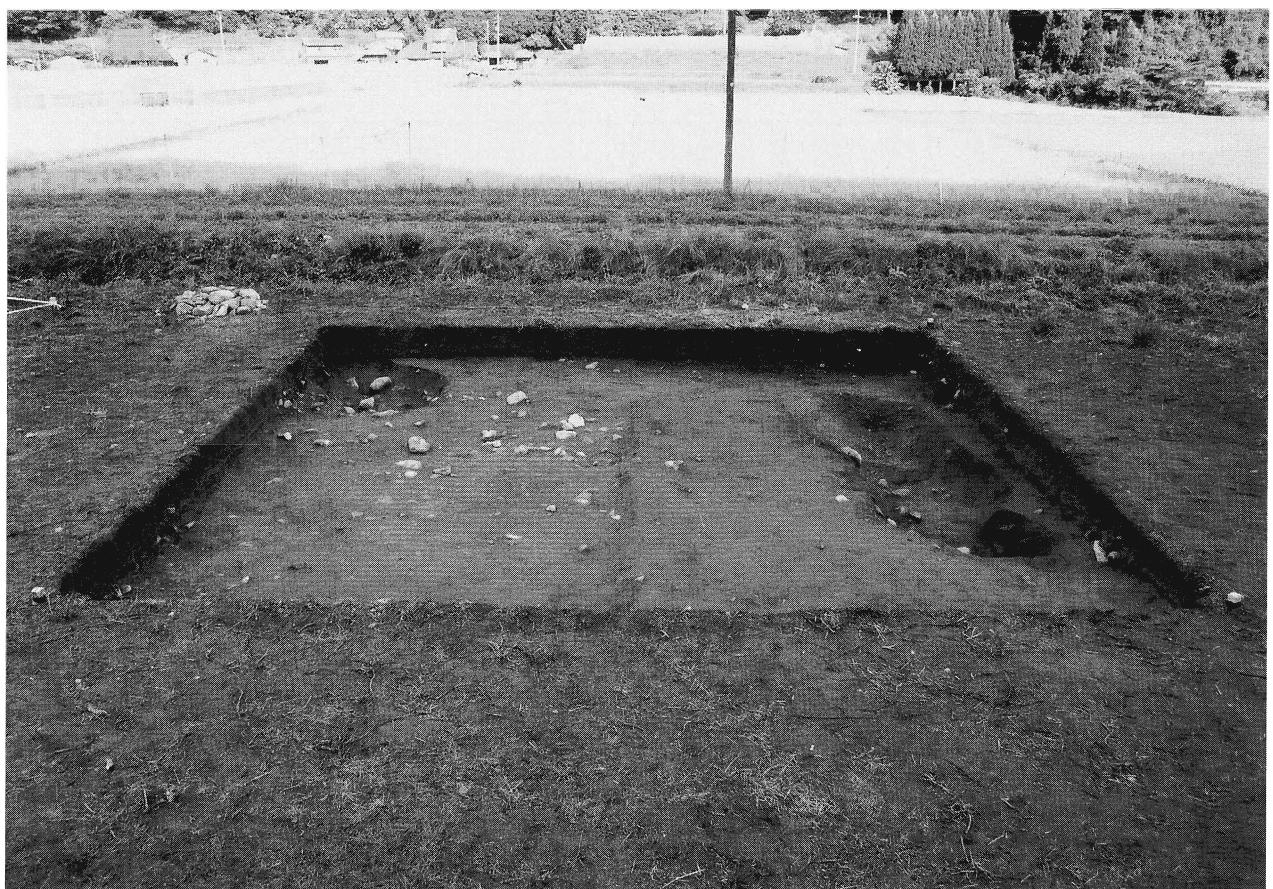


遺跡近景（南東側より）

図版 2



調査区設定状況（南東側より）



調査区全景（南東側より）



調査区北西壁セクション（南東側より）



調査区南西壁セクション（北東側より）

図版 4



SK-01・03検出状況（南西側より）



SK-01・02検出状況（南西側より）



SK-02・04検出状況（南西側より）



SK-01～04半截状況（南西側より）

図版 6



SK-01~04完掘状況（南西側より）



SK-05検出状況（北側より）

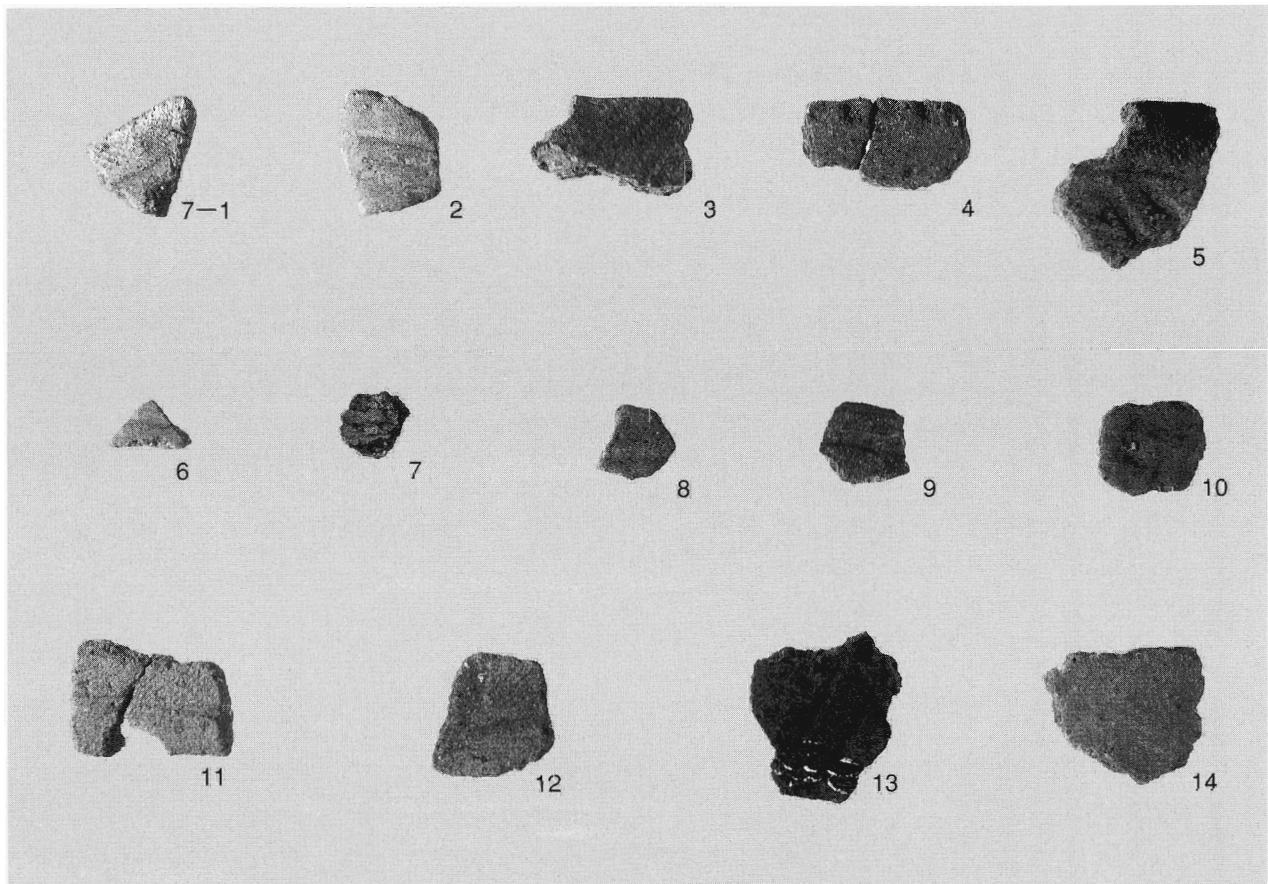


SK-05半截状況（南側より）

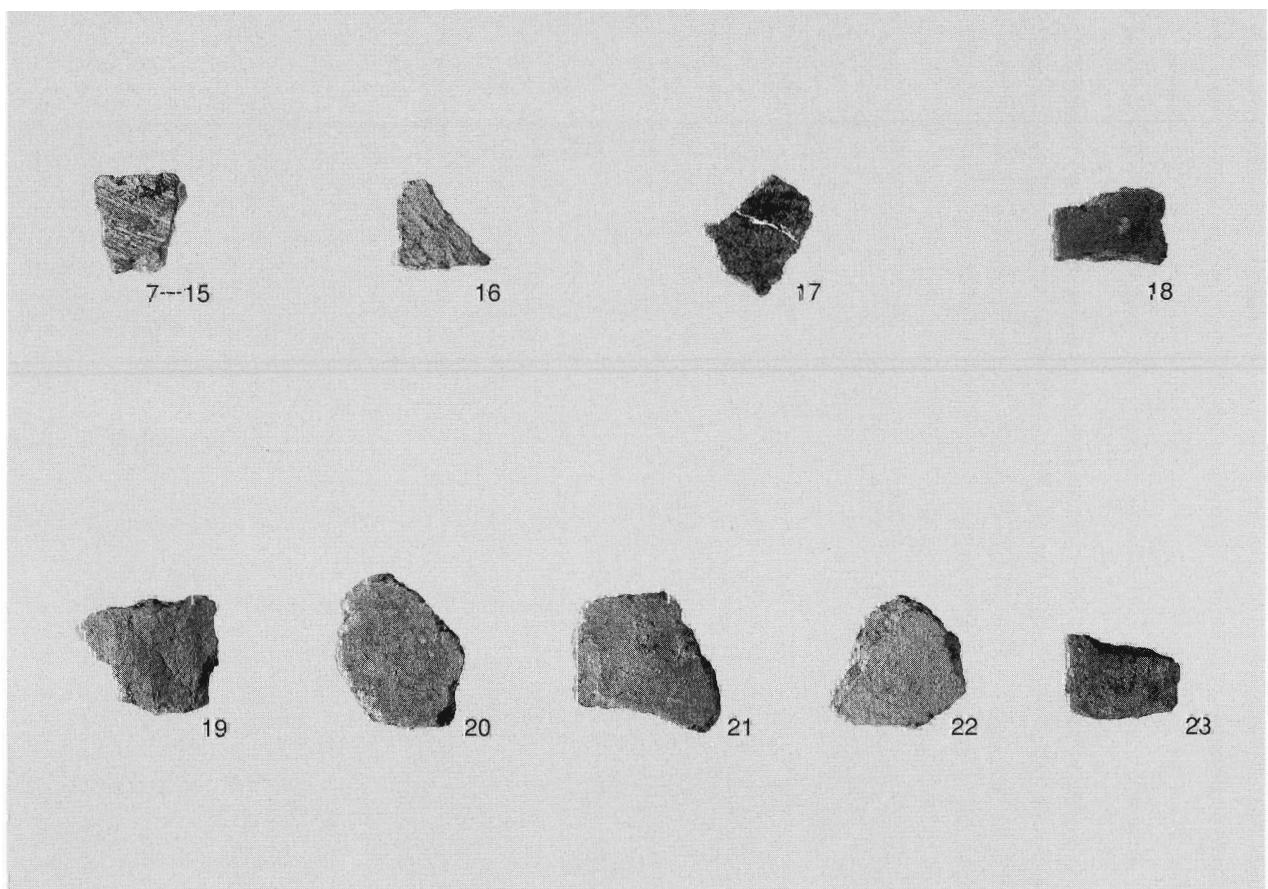


SK-05完掘状況（南側より）

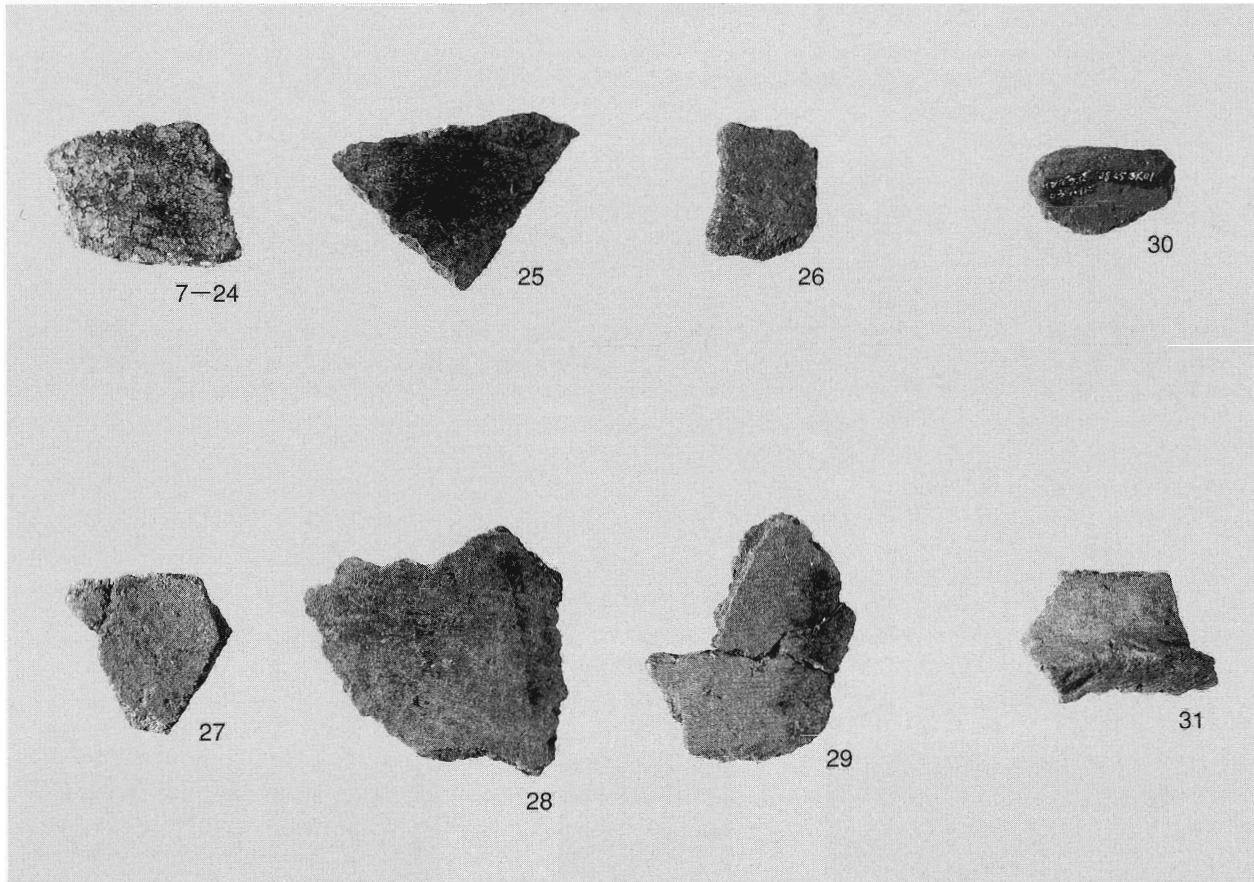
図版 8



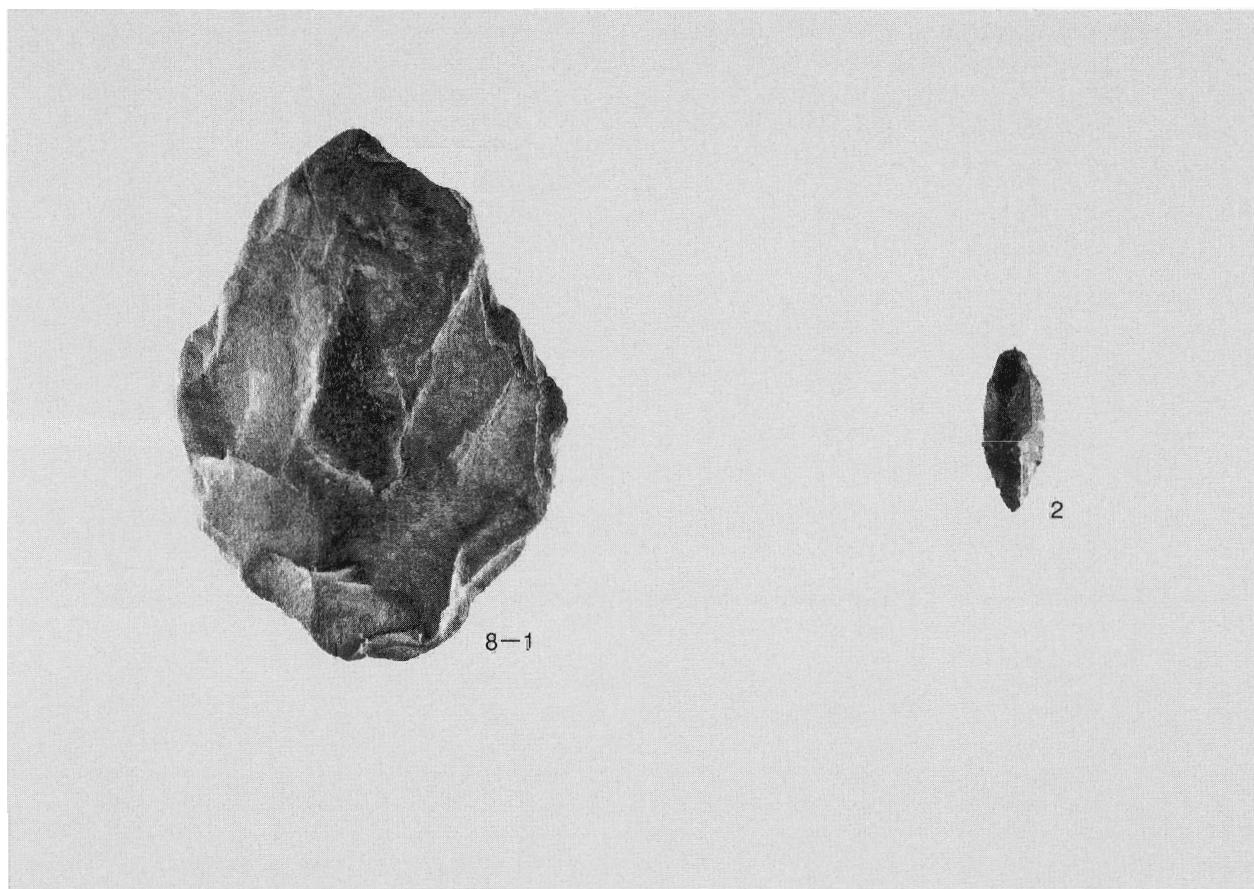
出土土器 (1)



出土土器 (2)



出土土器（3）



出土石器

報 告 書 抄 錄

ふりがな	いしがつぼいせきはっくつちょうさがいほう							
書名	石ヶ坪遺跡発掘調査概報Ⅰ							
副書名								
卷次								
シリーズ名	島根大学考古学研究室調査報告							
シリーズ号	第4冊							
編著者名	山根 航 樋口 英行							
編集機関	島根大学法文学部考古学研究室							
所在地	島根県松江市西川津町1060 tel 0852-32-6194							
発行年月日	2002年5月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いしがつぼいせき 石ヶ坪遺跡	しまねけん 島根県 みのぐん 美濃郡 ひきみちょう 四見町 しそ 紙祖	32482	52	34度 32分 55秒	132度 00分 19秒	20010820 20010903	36m ²	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
石ヶ坪遺跡	生活址	縄文時代	土坑6 柱穴9	縄文土器 石器				

島根大学考古学研究室調査報告 第4冊

石ヶ坪遺跡

発掘調査概報Ⅰ

2002年5月31日

発行 島根大学法文学部考古学研究室
〒690-8504 島根県松江市西川津町1060
TEL 0852-32-6194

印刷 株式会社 谷口印刷
〒690-0133 島根県松江市東長江町902-59
TEL 0852-36-5888